北方町文化財報告書第４集

笠下下原遺跡

（かさしたしもばる）

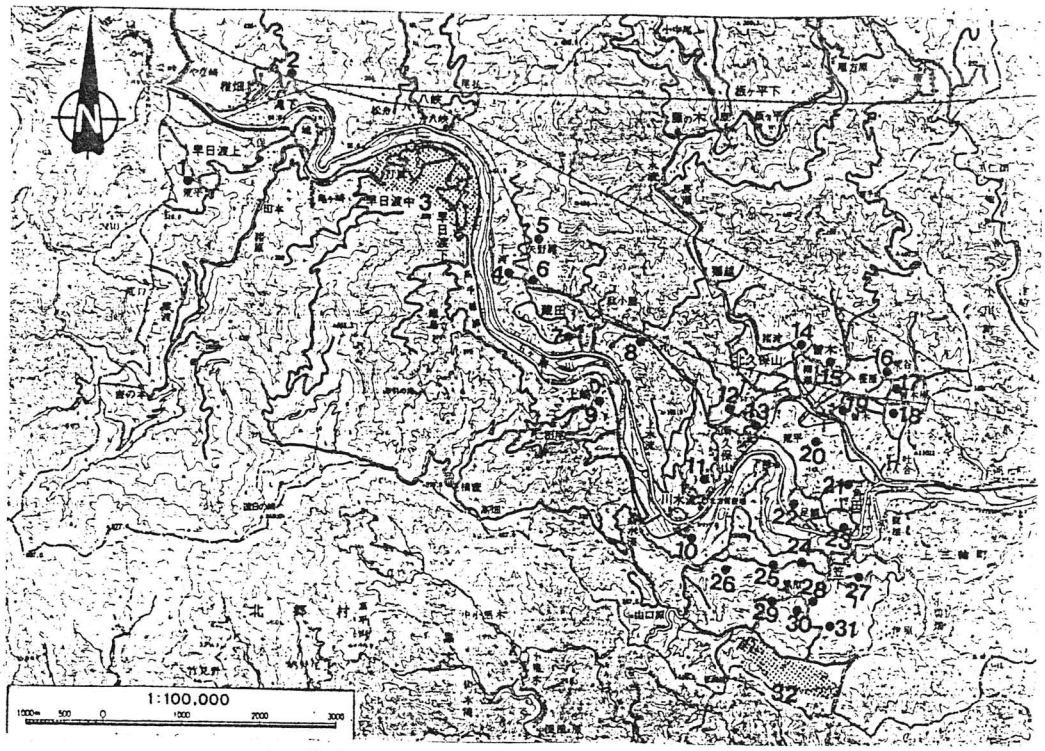
平成３年度農村基盤総合整備事業関係発掘調査概要報告書

１９９２年３月

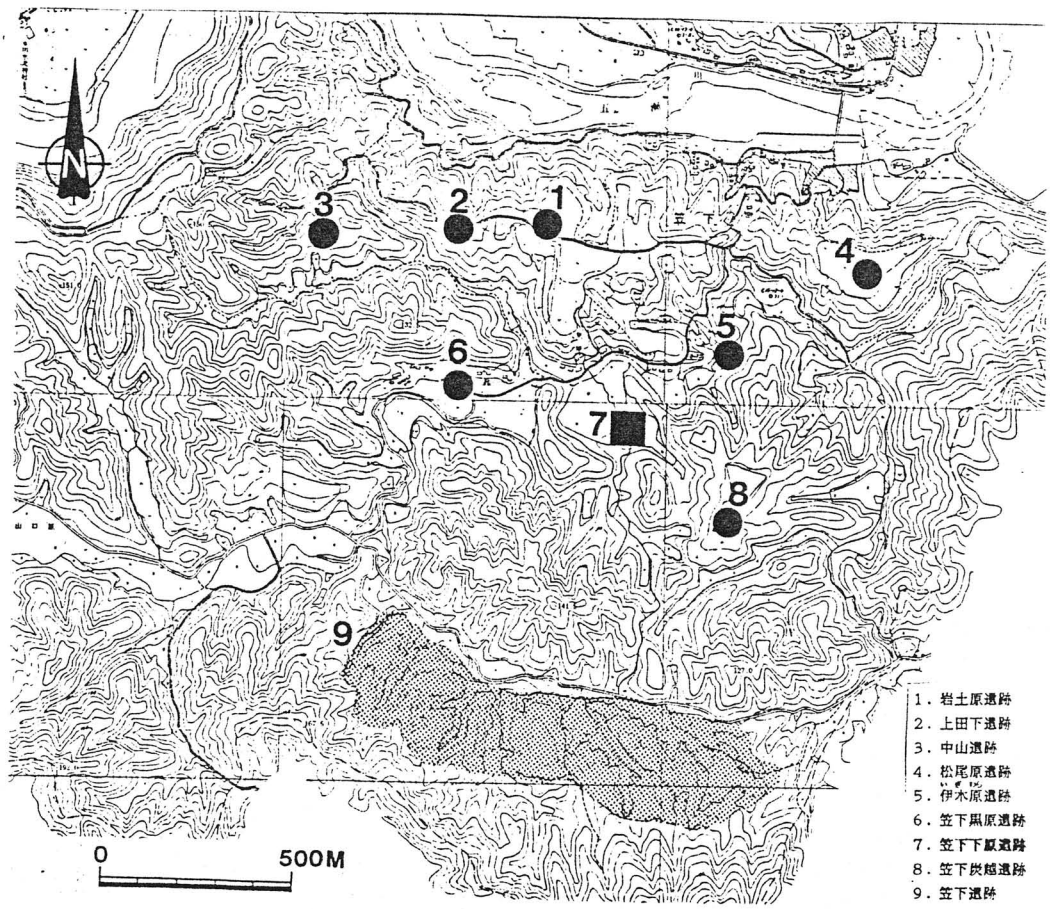
宮崎県東臼杵郡北方町教育委員会

笠下下原遺跡正誤表

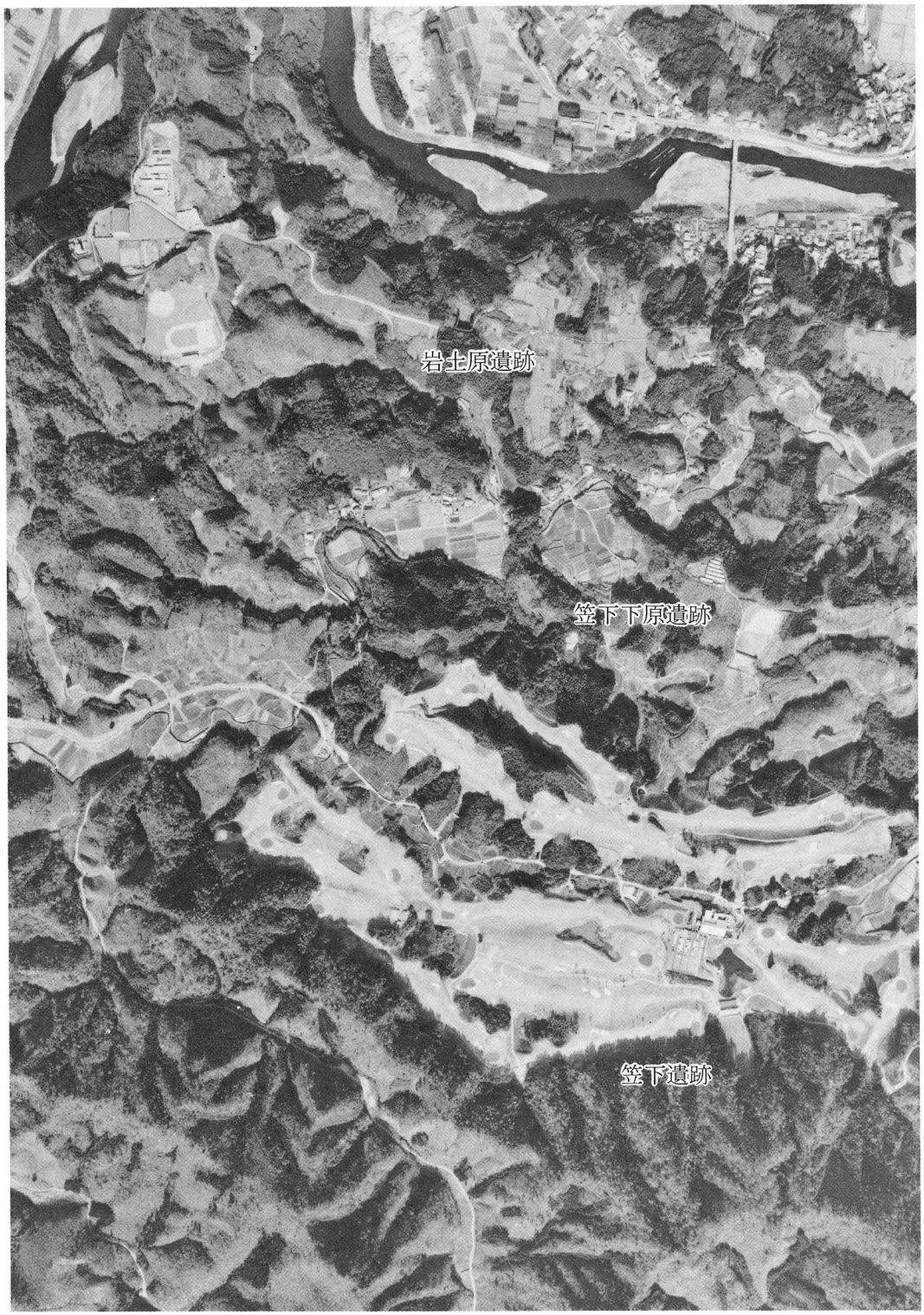
頁	行	誤	正
1	27	田辺建設	矢野組・(資)ピーシー技建工業
1	27	南久保山基盤整備組合	笠下黒原地区基盤整備組合
5	10	土坑基	土坑1基
12	4	1号土坑	2号土坑
28		224の実測図	削除する
29	27	陶磁器椀の底部片（224）	削除する
29	30~31	224には…無釉である。	削除する
30	15	神河内	天神河内
34		215～ 224	215～223（224）の写真は削除する。



1．北方町主要遺跡位置図(1/100,000)

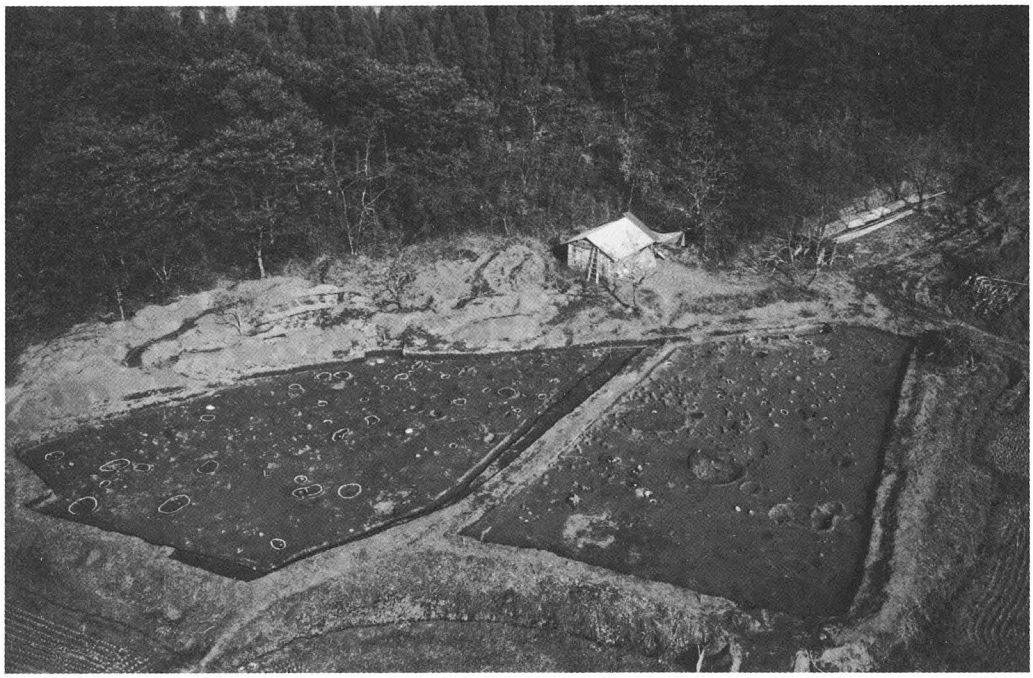


2．笠下下原遺跡及び周辺遺跡(1/10,000)

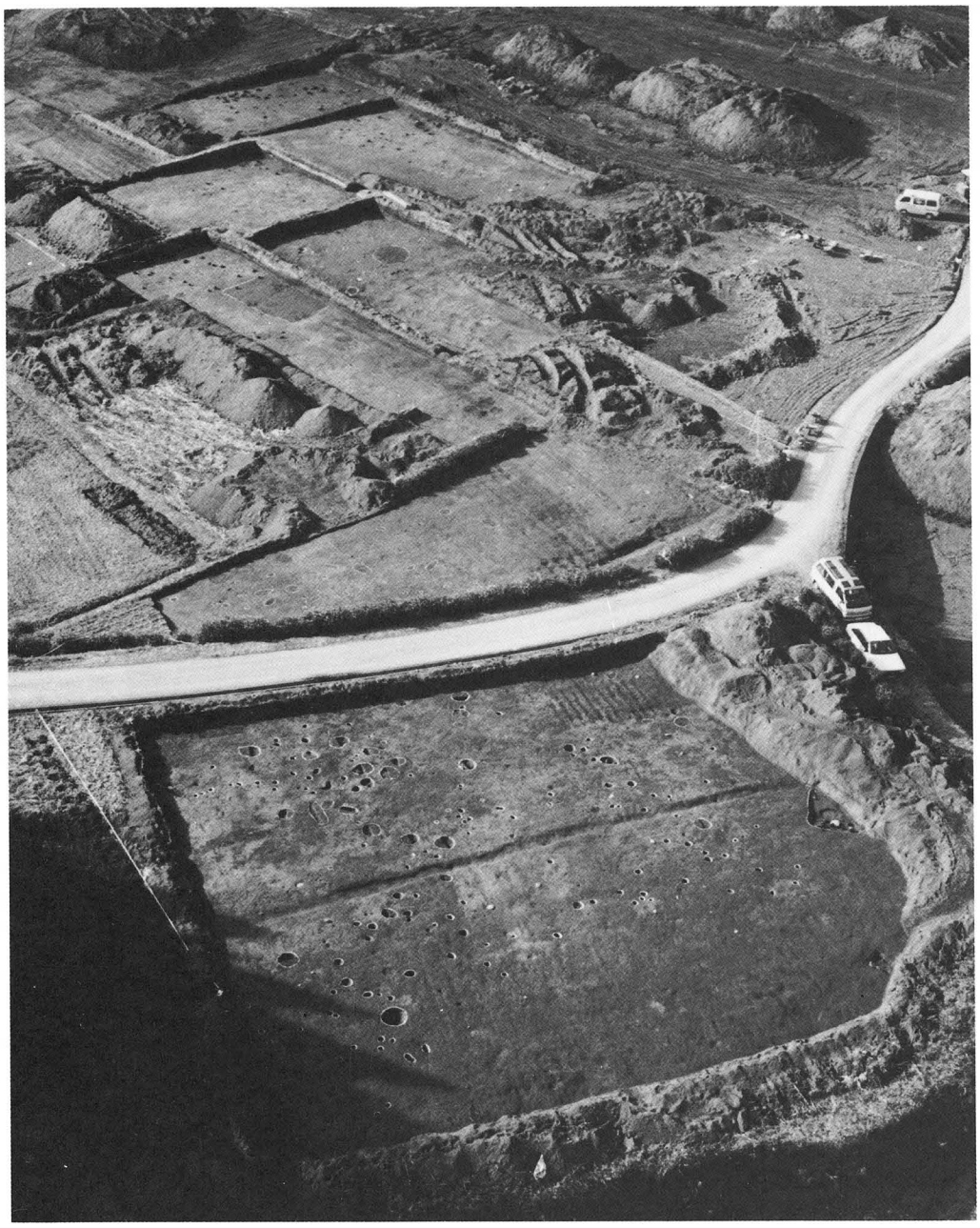


笠下下原遺跡周辺航空写真

調査区遠景(北より)



I 区空中写真(西より)



Ⅱ・Ⅲ区空中写真(東より)

Ⅱ・Ⅲ空中写真(西より)

序

現在本町では、豊かで魅力あふれる町づくりをめざし、それぞれの地域にあった経済活性化の基盤づくりを進めております。そして、その施策の一つである農業基盤総合整備事業も、ここ数年町内各地で進められています。

北方町教育委員会では、これらの開発工事から埋蔵文化財を保護し、調和のとれた町づくりを進めるため、関係機関と協議を行い、遺跡の保存やその発掘調査を実施しています。

この報告書は、平成3年度に実施しました北方町寅（笠下）に所在する笠下下原遺跡の発掘調査の記録であります。この調査では縄文時代の集石遺構や古墳時代の住居跡を始め各時代の貴重な遺物を多数発見することができ、当時の人々の暮らしやその地域での文化の形勢過程を知る上で貴重な資料を得ることができました。

調査にあたり、御協力をいただいた関係機関ならびに関係者の各位に対し厚く御礼申しあげるとともに、本書が文化財に対する認識や理解のため、また、研究の資料として活用されることを願うものです。

平成4年3月31日

北方町教育委員会

教育長　河井行雄

例　　言

1．本書は、平成３年度農村基盤総合整備事業に伴う東臼杵郡北方町笠下下原遺跡の発掘調査概要報告書である。
2．本調査は、北方町農政課からの依頼により、北方町教育委員会が実施した。
3．現地の実測図は小野信彦・飯田博之（県文化課）、黒木小夜子・佐藤きみえ・田口真理子（北方町）が行った。
4．掲載写真のうち空中写真は宮崎空撮が、遺構・遺物は小野が撮影した。
5．遺構・遺物の実測・トレース等は主に小野が行い、黒木小夜子・佐藤きみえ・田口真理子・西村有子（北方町）の協力を得た。
6．石材の鑑定に関しては、足立富男氏（門川町）・宍戸章氏（宮崎市）・松田正利氏（延岡市）の御教示を受けた。
7．本書に使用したレベルは海抜高で、方位は磁北で示した。
8．本書の執筆及び編集は小野が行った。
9．題字は佐藤嘉紘氏（北方町長）の揮毫による。
10．出土遺物や写真・図面については北方町教育委員会で保管している。

目　　次

Ⅰ　はじめに …… 1
　1．発掘調査に至る経過 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
　3．調査地点の位置と環境 …… 2
Ⅱ　調査の内容 …… 4
　1．発掘調査の概要 …… 4
　2．基本層序 …… 5
　3．遺構 …… 6
　4．遺物 …… 14
Ⅲ　終わりに …… 30

Ⅰ．は　じ　め　に

1．発掘調査に至る経過

北方町で農業基盤総合整備事業が開始されたのは、昭和62年度からであった。本年度は南久保山及び笠下黒原の２地区が工事の対象となった。北方町教育委員会では、工事担当部局である北方町農政課より工事担当地区内の遺跡の有無についての照会を受け、平成３年８月22日より28日まで笠下黒原地区の工事予定地内の試掘調査を行った。

この結果、笠下下原地区において遺跡の存在が確認された。北方町教育委員会はこの調査をもとに、北方町農政課と遺跡の取り扱いについて協議したが、工法変更等による遺跡の現状保存は不可能となり、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成３年11月19日より開始し、関係機関や地元作業員の方々の御協力により平成４年１月31日に無事終了した。調査の結果、縄文時代の集石遺構、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡を始め、縄文時代前・中期の土器や石器など重要な資料や新知見を得ることができた。

2．調査の組織

平成３年度に実施した笠下下原遺跡の発掘体制は以下の通りである。

調査委託者	北方町農政課	
調査主体	北方町教育委員会	
	教育長	河井行雄
	社会教育課長	三浦　弘
調査事務	社会教育課長補佐	永田信義
調査担当	社会教育課主事	小野信彦
調査指導	宮崎県文化課	

発掘調査及び本書を作成するにあたり、下記の方々に多大な御教示・御協力を頂いた。記して感謝致します。（五十音順）

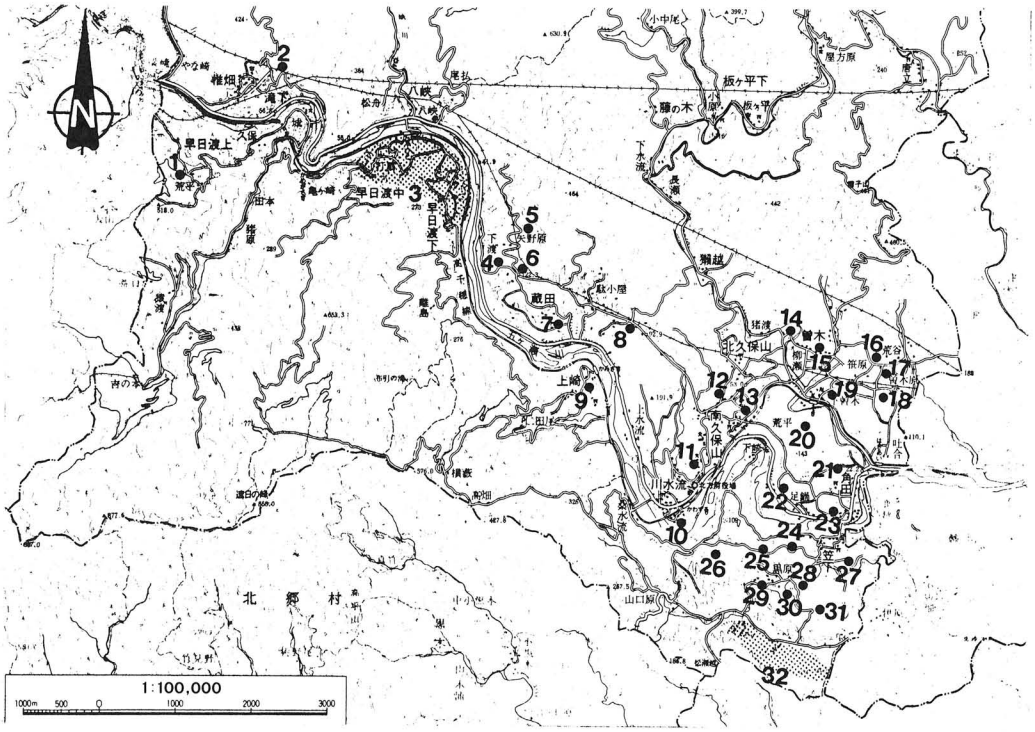
池田洋子氏（北川町）、近藤協氏（宮崎県総合博物館）、沢皇臣氏（北川町）、下澤公明氏（岡山県古代吉備文化財センター）、高橋護氏（岡山県立博物館）、橘昌信氏（別府大学）、田辺建設、永友良典氏（宮崎県埋蔵文化財センター）、南久保山基盤整備組合、間壁忠彦氏・間壁葭子氏（倉敷考古館）、宮崎県市町村埋蔵文化財担当者各位、宮崎県文化課埋蔵文化財担当者各位、柳沢一男氏（宮崎大学）、及び地元関係各位

3．調査地点の位置と環境

笠下下原遺跡は、宮崎県東臼杵郡北方町笠下に所在し、五ヶ瀬川の支流である伍領川の蛇行によって形成された段丘上に位置する。川からの比高差は約13mである。Ⅰ区とⅡ区の間の奥には湧水がある。棚田が伍領川に向かって緩やかに下る斜面を削って作られており、遺跡の残りは端部に行くにしたがって悪くなる。

笠下下原遺跡の周辺は小さな谷によって隔てられた緩やかな台地がいくつもあり、その台地上に遺跡が点在している。有名なところでは、尾根一つ越えた北側の台地上に昭和44年に南九州大学によって発掘調査が行なわれ、船野型細石核と隆帯文土器がセットで出土した岩土原遺跡が存在する。

また、南側は現在ゴルフ場になっているが、建設に先立って発掘調査が行われ縄文時代早期の集石遺構、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡、中世の五輪塔群・溝状遺構・掘立柱建物群・祭祀遺構等が確認された笠下遺跡が、その中間には散布地である炭越遺跡が存在する。



1．荒平遺跡
2．ジウモチ谷遺跡（県史：多木遺跡）
3．速日峰地区遺跡
4．矢野原小平（おびら）遺跡
5．矢野原石棺群
6．蔵田奥畑石棺群
7．蔵田遺跡
8．駄小屋遺跡
9．上崎（かみざき）遺跡
10．川水流（かわずる）遺跡
11．東原遺跡
12．十朗ヶ尾遺跡
13．南久保山小堀町遺跡
14．仲畑遺跡
15．後曽木古墳（旧：北方村古墳）
16．荒谷遺跡
17．曽木原遺跡
18．黒仁田遺跡
19．下曽木遺跡
20．年の神石棺群（旧：柩（ひつぎ）野石棺群）
21．権現原遺跡
22．足鍋遺跡
23．角田上原遺跡
24．岩土原遺跡
25．上田下遺跡
26．中山遺跡
27．松尾原遺跡
28．伊木原（いぎわら）遺跡
29．笠下黒原遺跡
30，笠下下原遺跡
31．笠下炭越遺跡
32．笠下遺跡

1．北方町主要遺跡位置図(1/100,000)

さらに西側には、ほ場整備工事中に弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての土器片が発見された笠下黒原遺跡[注1]の外、散布地となっている中山遺跡[注2]や上田下遺跡がある。

東側の松尾原遺跡や伊木原遺跡では現在でも遺物の採集が可能である。

このように、笠下下原遺跡の周辺は旧石器時代から現在まで人々が繰り返し生活を営むのに非常に適した環境であったと思われる。

注1・2　元延岡市社会教育課長甲斐常美氏の御教示による。

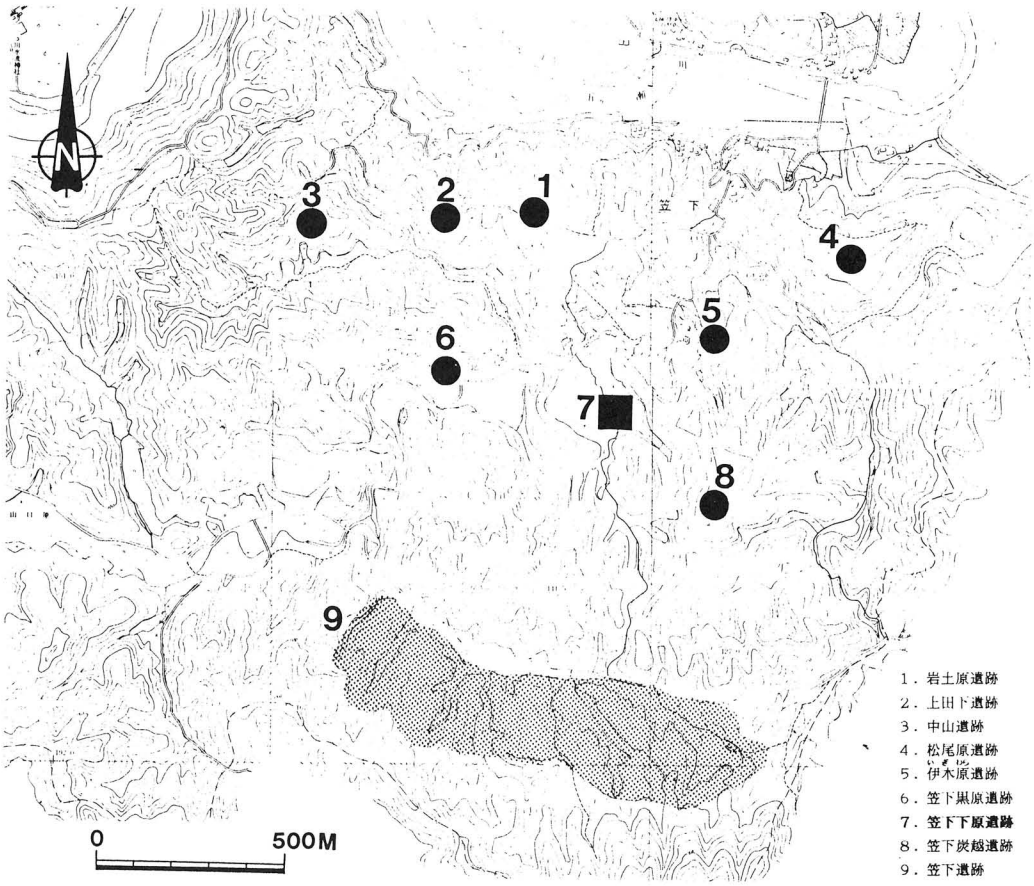
主要参考文献

① 鈴木重治『日本の古代遺跡　25　宮崎』保育社（1985）

② 宮崎県『宮崎県史　資料編　考古1』（1988）

③ 宮崎県考古学会『宮崎考古　石川恒太郎先生米寿記念特集号　上巻』（1988）

④ 北方町教育委員会『笠下遺跡』（1990）



2．笠下下原遺跡及び周辺遺跡（1/10,000）

Ⅱ．調　査　の　内　容

１．発掘調査の概要

発掘調査に先立ち、工事によって影響を受けると思われる部分全てにトレンチを入れ土層及び遺跡の範囲の確認を行った。

その結果、調査区の北側（特に端部）は造成によって大部分がかなりの削平を受けていることが分かった為、残りの良い南側裾部を中心に調査区を設定した。

3．調査区図(1/2,000)

発掘調査は、耕作や工事との関連でⅠ区→Ⅱ区→Ⅲ区の順に行った。

土層の堆積状況はⅠ区が最も良く、アカホヤ層の上面に縄文時代前期・中期を中心とする包含層を確認した。Ⅱ区及びⅢ区では、耕作土を除去するとすぐにアカホヤ層が検出された。Ⅰ区の西側とⅢ区の北側の一部ではアカホヤ層あるいはⅤ層をも削平されていた。

笠下下原遺跡では、縄文時代前期・中期の遺物に混じって旧石器時代の石器がいくつか出土したため、トレンチを入れて旧石器時代の包含層を確認したが、遺構・遺物共に発見できなかった。

遺構はⅡ層中よりの集石遺構3基、アカホヤ層上面で古墳時代前期の竪穴住居跡1基・土坑基及び時期不明の溝状遺構1基の他多数の土坑・ピットを検出した。

遺物はⅡ層中より縄文時代前期・中期を中心として総数千点に及ぶ遺物が出土した。そのほとんどは土器・石器で占められ、僅かに陶磁器が認められる程度である。

2．基本層序

笠下下原遺跡の基本層序は以下の通りである。調査区によってはⅢ層及びⅣ層が削平されている。

Ⅰ層…表土若しくは耕作土。(10～20cm)

Ⅱ層…茶褐色土若しくは床土。(20～30cm) 土師器・陶磁器等が出土。

Ⅲ層…黄茶褐色土層。(30～40cm) パサつく。アカホヤ層が混じる。主に縄文時代前期・中期の遺物が出土。

Ⅳ層…アカホヤ層。(20～30cm)

Ⅴ層…暗黄褐色土層。(10～20cm) やや粘質。縄文時代早期の遺物が若干出土。

Ⅵ層…暗茶褐色土層。粘質。小砂利が混じる。

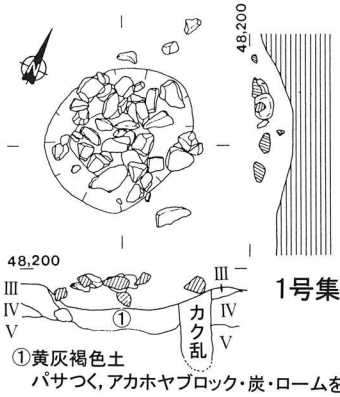
4．土層写真

3．遺構

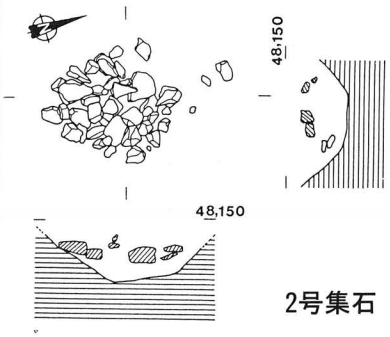
① 集石遺構

いずれも火を受けた挙大の円礫もしくは角礫が集まった状態で検出された。3基とも掘り込みを持つ。3基のうち1号集石と2号集石は近接する。3号集石は撹乱を受けている。縄文時代早期の集石遺構に見られるような明確な敷石は持たない。埋土には若干の炭や焼土が混じる程度である。焼け石には炭やタールの付着は認められなかった。集石遺構内より遺物の出土はなかったが、集石遺構周辺より縄文時代前期・中期の遺物が出土している。

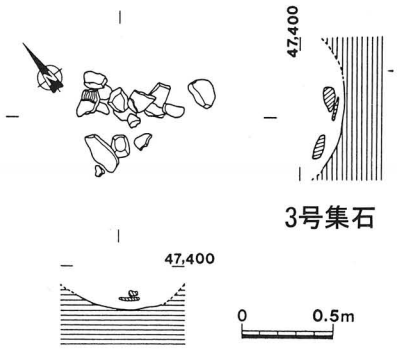
5. 1号集石



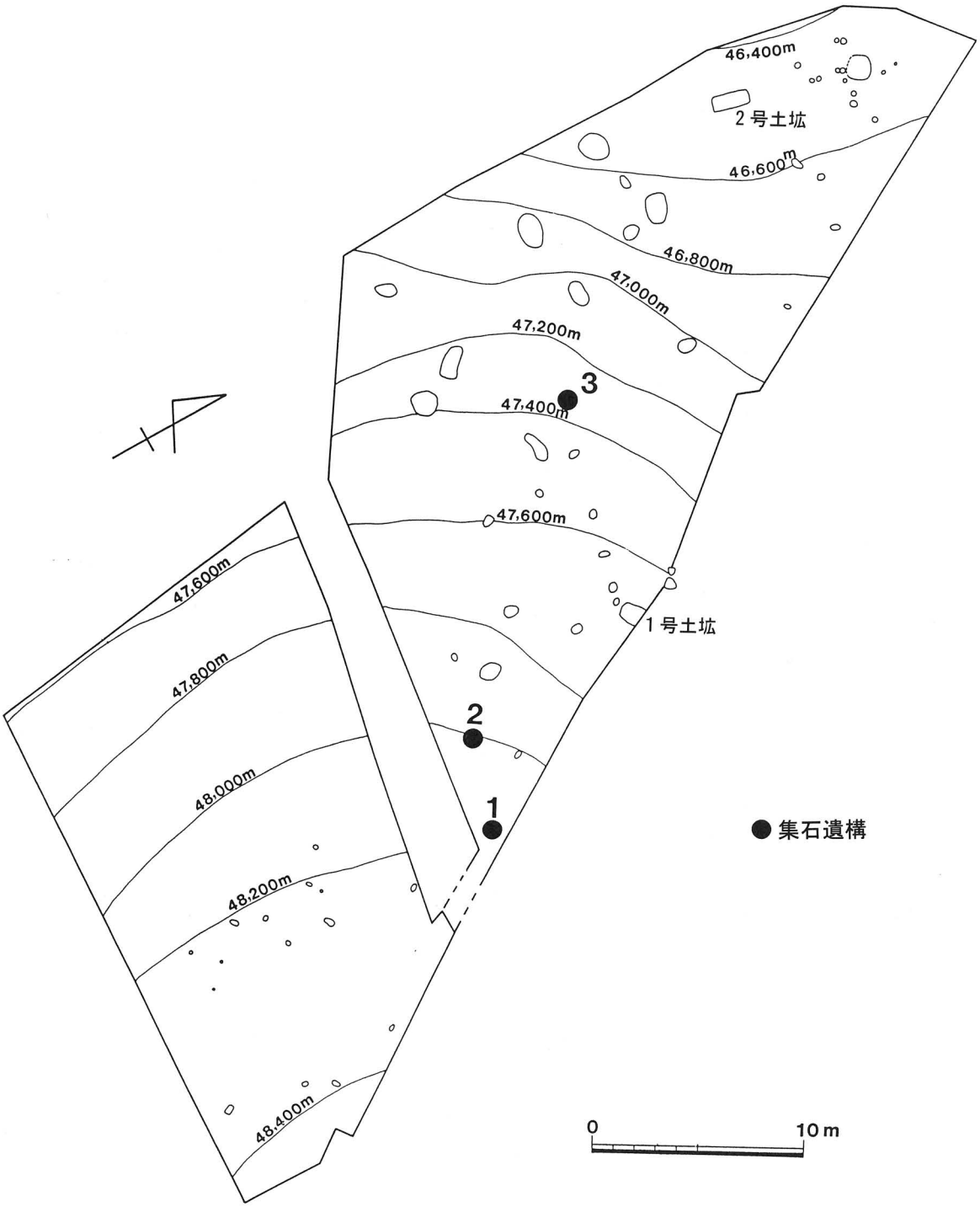
6. 2号集石



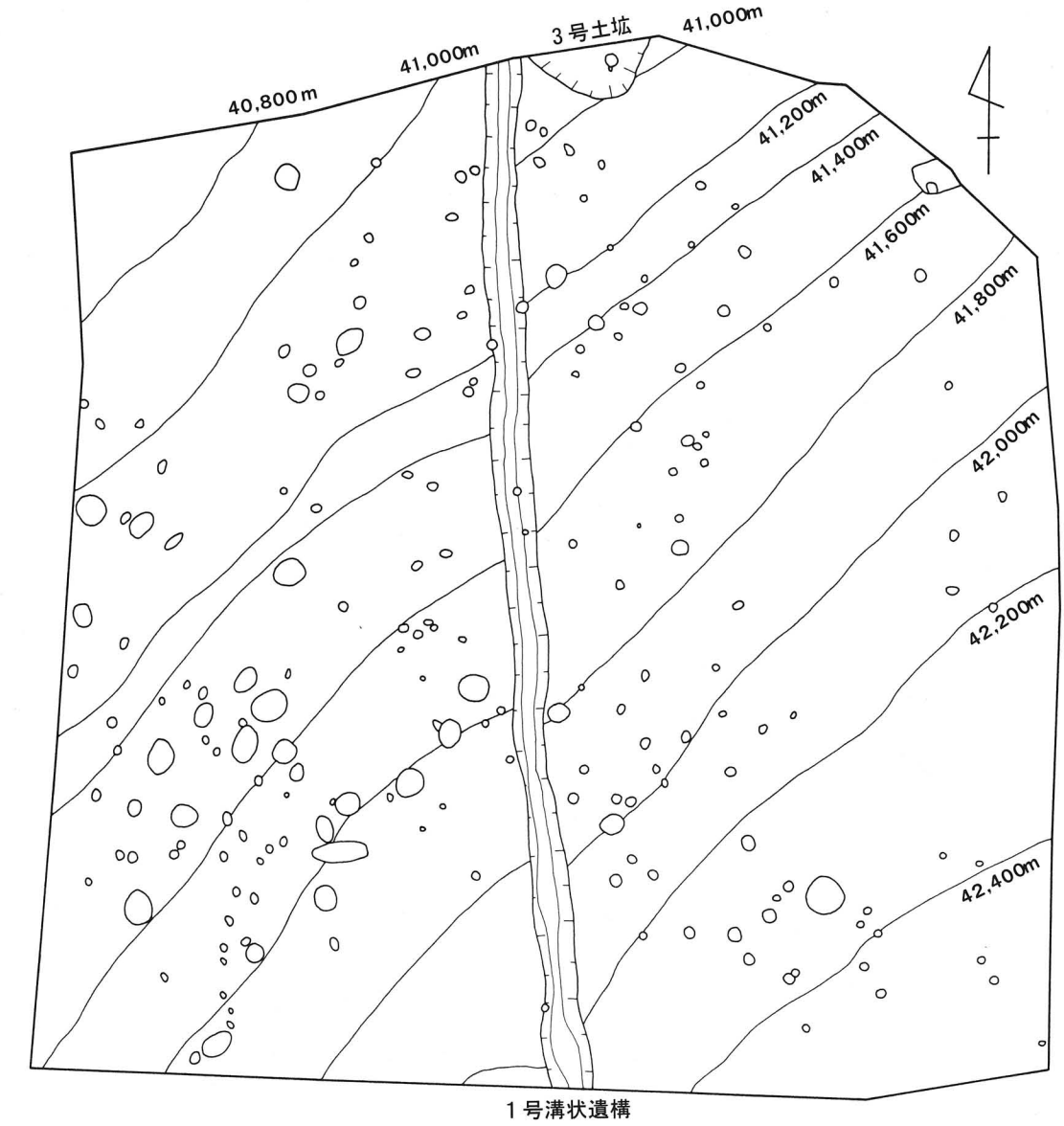
7. 3号集石



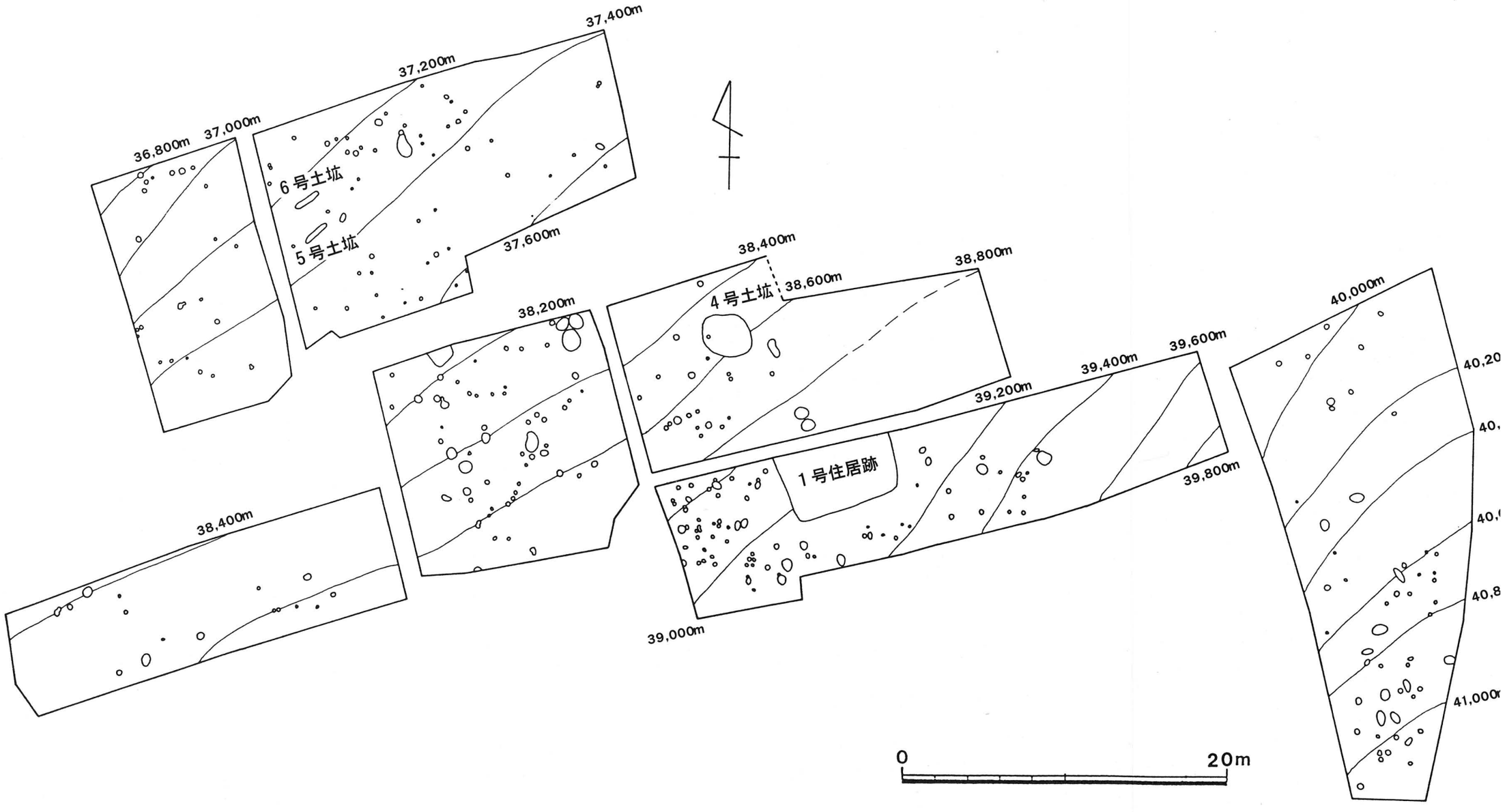
8．集石遺構実測図(1/40)



9. Ⅰ区遺構配置図(1/300)



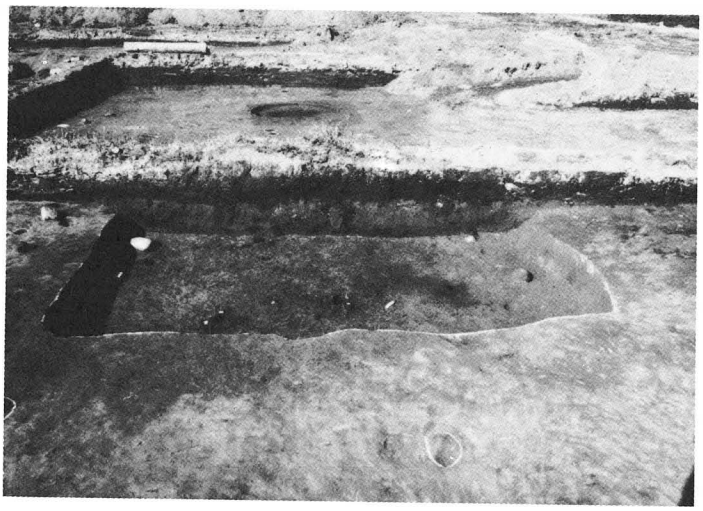
10．Ⅱ区遺構配置図(1/200)



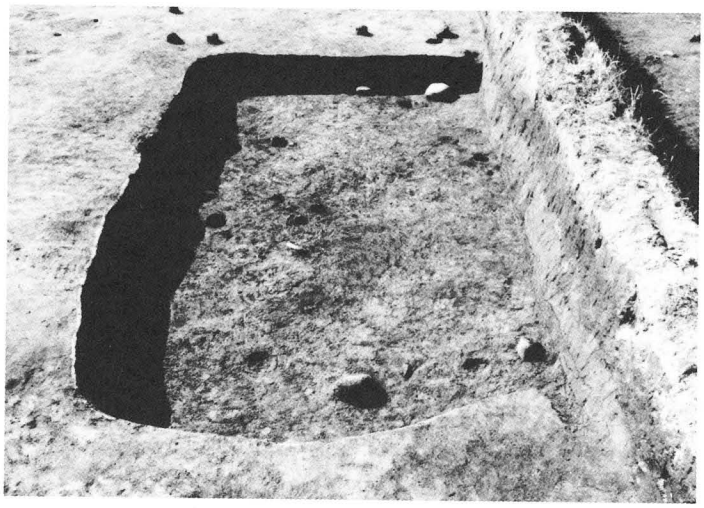
11．Ⅲ区遺構配置図(1/300)

② 竪穴住居跡

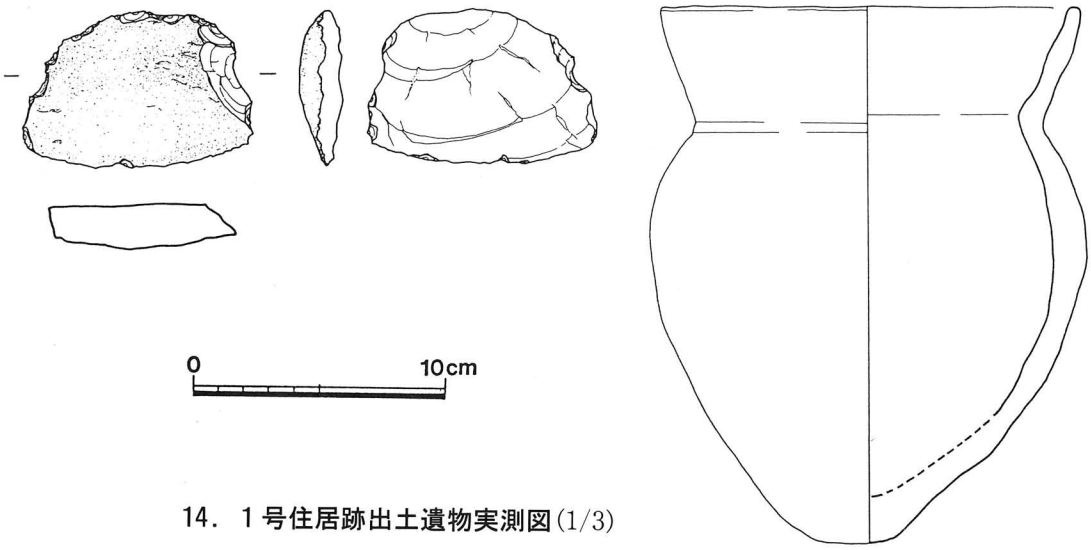
Ⅲ区の中央部付近で検出した。北側の約３分の２が、田の造成により削平されている。もともとは一辺約７ｍのやや隅丸方形をした住居跡であったと思われる。柱穴は壁よりやや離れて５ヶ所検出した。いずれも浅い。焼土は中央やや南西よりと南西の壁の角から約60cmの所の２ヶ所を検出した。ベッド状遺構等は認められない。西壁中央には花崗岩製の巨礫が据えられている。土坑は中央に楕円形の浅いのを一ヶ所検出した。中に遺物・焼土・炭化物等は認められない。遺物は少なく、北東の壁際で完形の壷が、埋土中より若干の土器片それに打製石器が１点出土したのみである。打製石器は砂岩の横長の剥片を利用している。両端に抉りが、弧部には歯こぼれが認められる。打面は除去されている。半面に自然面が残る。壷は口径がやや体部最大径をしのぐ。口縁部はやや内傾し、指押さえにより成型されている。内外面ともに丁寧なナデが施されている。底部の稜は明瞭でない。胴部中央にはススの付着が認められる。



12．１号住居跡（南より）



13．１号住居跡（東より）



14．１号住居跡出土遺物実測図(1/3)

③ 土坑

アカホヤ層上面で多数の土坑を検出したが、ほとんどの土坑からは出土遺物がない。土坑の大半は不定形で、長方形・円形は少ない。１号土坑と２号土坑はＩ区で検出した。１号土坑は長軸約1.5m、短軸約0.6m、深さ約0.6mを計り、長方形プランを呈す。３号土坑はⅡ区で検出した。コーナーのみの検出なので、規模・プランとも不明である。中に花崗岩の石、陶磁器片（近世）、焼け石、縄文土器片などが混在する。４号土坑は１号住居跡の北側で検出した。長軸約3.5m短軸約2.7m、深さ約0.1mを計り、楕円形プランを呈す。中に大量の炭と焼土の外、若干の土師器片が入っていた。住居跡との関係は不明である。５号土坑と６号土坑はⅢ区の北西側で近接して検出した。長軸約1.8m、短軸約0.3m、深さが５号土坑で約0.8m、６号土坑で約1.0mを計り、長楕円形プランを呈す。途中にやや意識した程度の段が見られるものの、底に柱穴等は見られない。

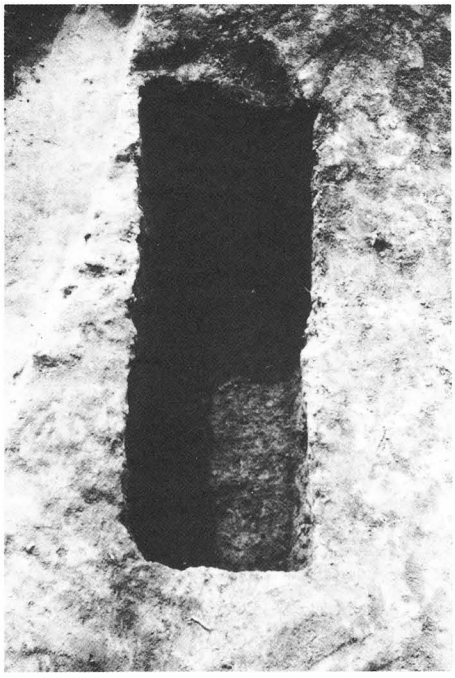
④ 溝状遺構

Ⅱ区の中央部をほぼ南北に走り、端部はそれぞれ調査区の外となる。断面形はU字形を呈し、検出した範囲で最大幅1.3m、深さ約0.2～0.3mを計る。

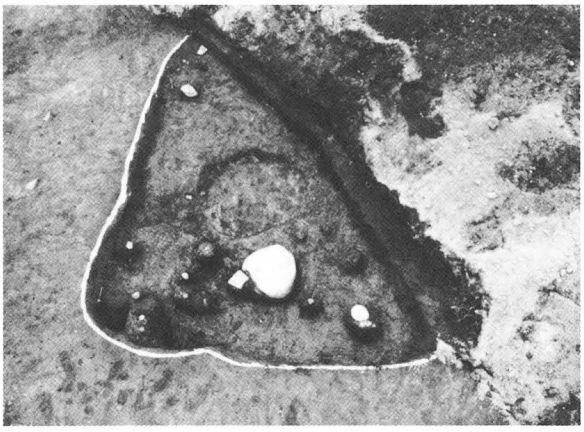
遺物は、陶磁器片、焼け石、縄文土器片などが出土した。

15．１号溝状遺構(南より)

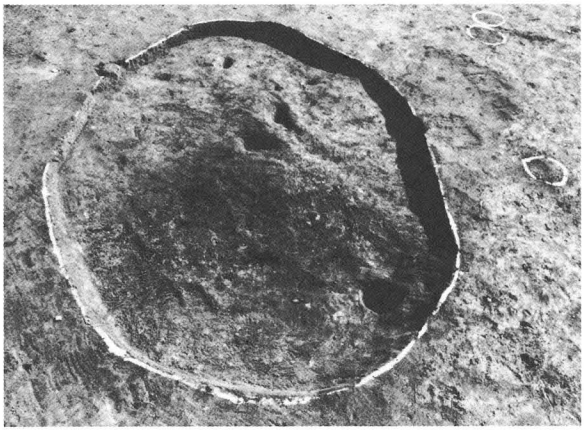
16．1号土坑(西より)



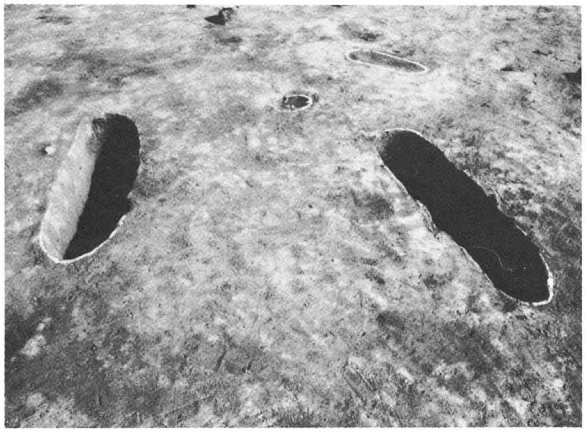
17．2号土坑(南より)



18．3号土坑(南より)



19．4号土坑(西より)



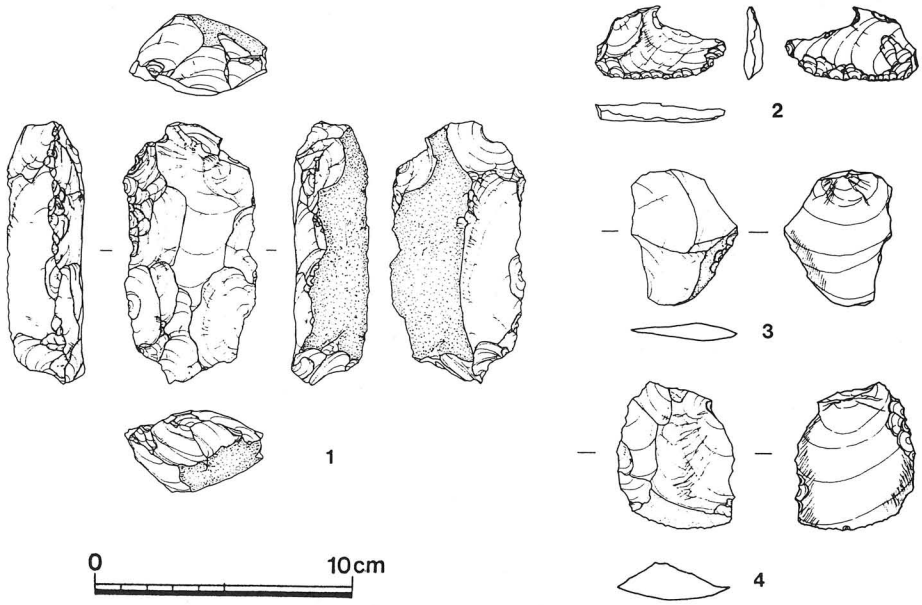
20．左・6号土坑，右・5号土坑(西より)

4．遺物

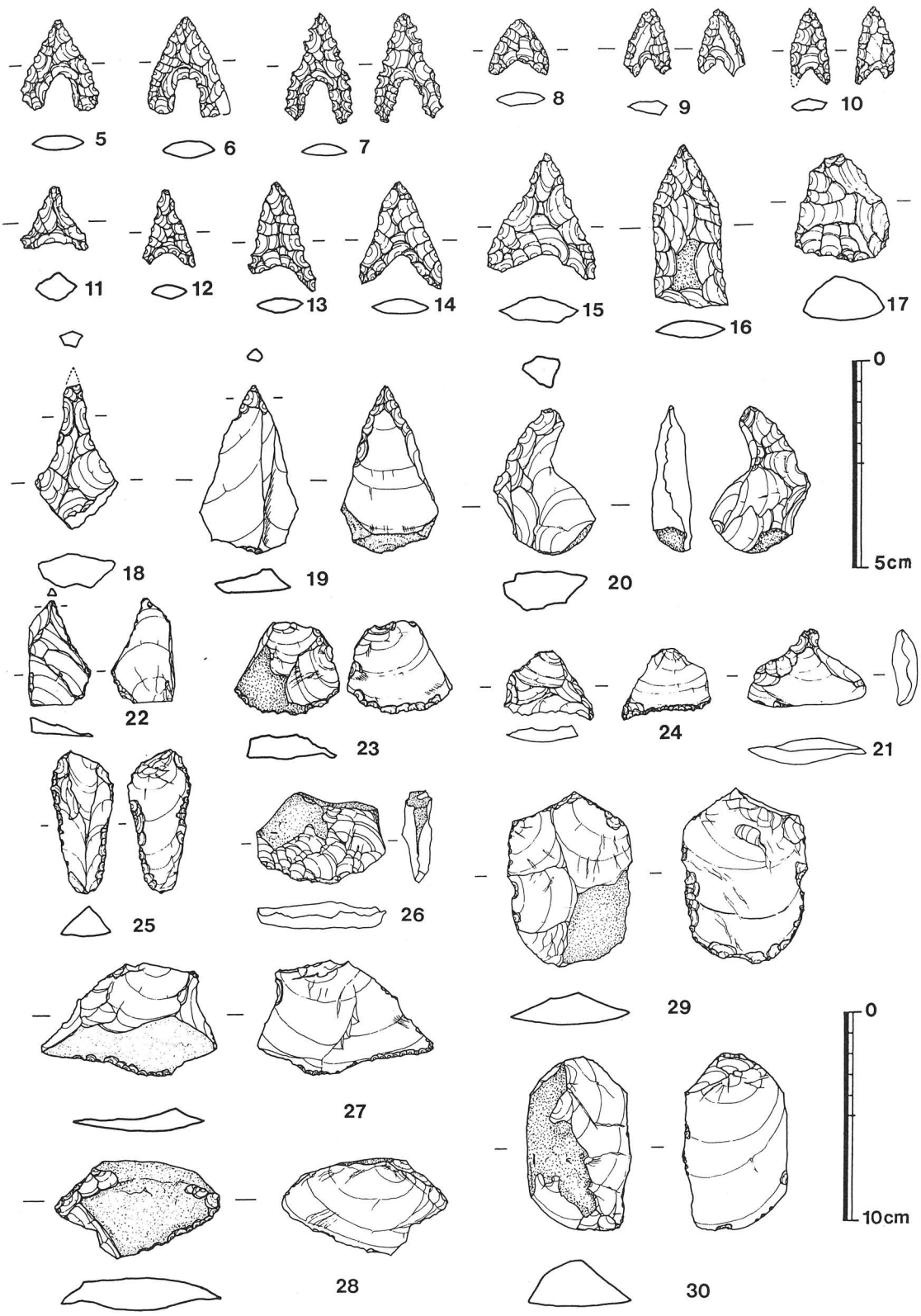
① 石器

石鏃、石錐、スクレイパー、石核、石斧（打製・磨製）、敲打器、礫器、石皿等が出土している。今回は、これらの中で代表的なものを図示した。

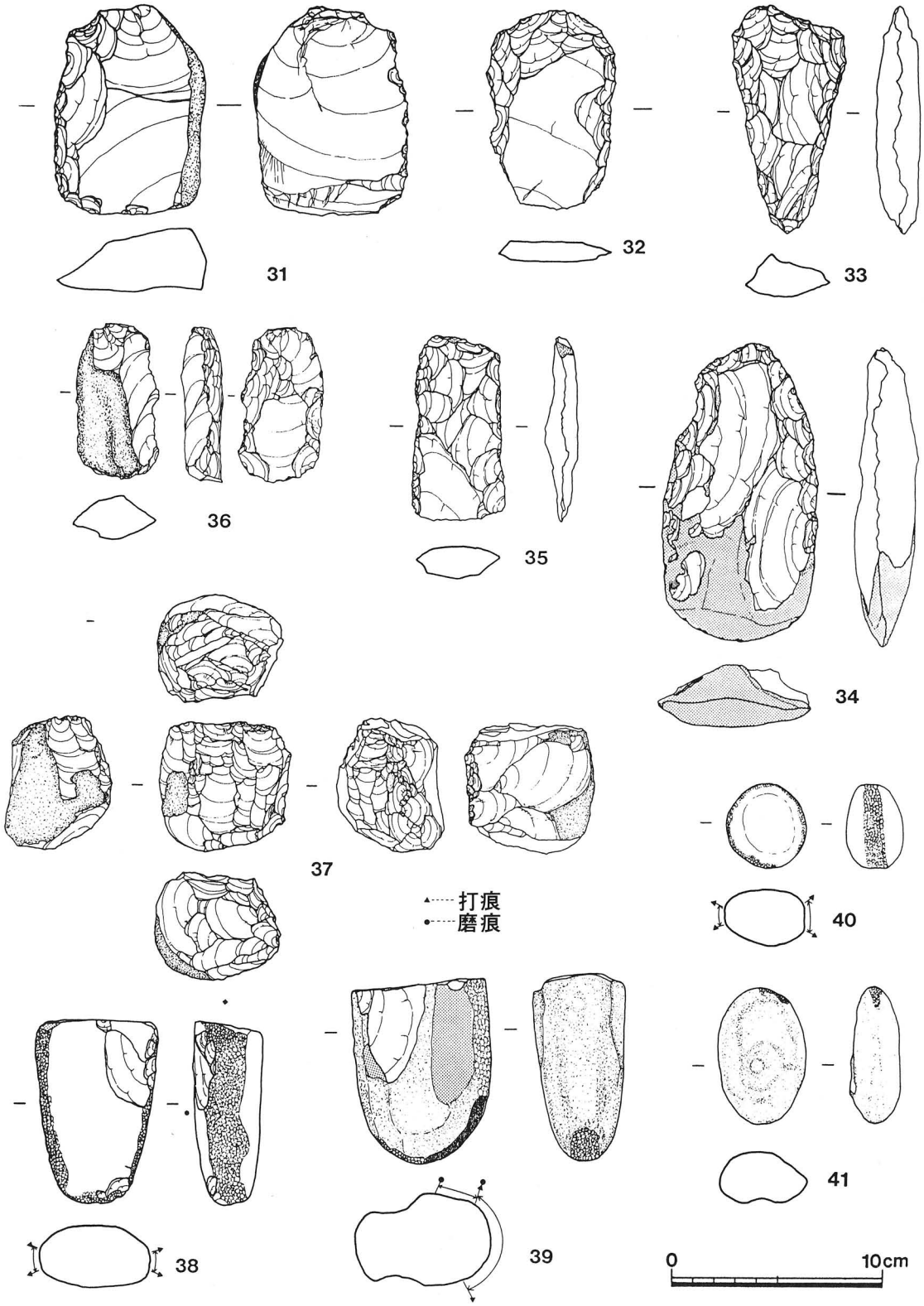
1～4は旧石器時代の遺物である。いずれも他の時代の遺物に混じって出土した。1は剥片素材の石核、2～4はスクレイパーである。1・3・4には打面が残る。5～16は石鏃である。5～7は縄文時代早期、16は縄文時代晩期の特徴的な石鏃である。8～14は姫島産の黒曜石を利用している。11は未成品と思われる。17はチャート製の小型のスクレイパーである。18～21は石錐である。20の弧部の加工痕はスクレイパーを意識していると思われる。22～29はスクレイパーである。22・27・29は主に先端部を利用したと思われる。30～31は使用痕の認められる剥片。30は短軸の弧部を、31は自然面とは反対側の長軸の直線部を刃部として使用している。32は砂岩製の偏平な打製石器である。加工によって弧状の刃部を作り出している。33～35は石斧である。34は先端部を磨いて刃部を作っている。36・37は流紋岩の石核である。36は剥片素材の石核、37は円礫を利用した石核である。2回目の打面転移は90°方向に行っている。38～48は敲打器である。38・39は石斧を再利用した感がある。41は片面にくぼみが見られ、焼けて赤褐色をしている。43～44・46～47にもくぼみ部が見られる。46～47は凝灰岩製のためか、風化が著しく使用痕等は不明である。49～53は礫器である。49は両面に磨痕が見られる。片面にくぼみがあり、端部には抉りを意識した加工が見られる。50の端部は著しく潰れている。



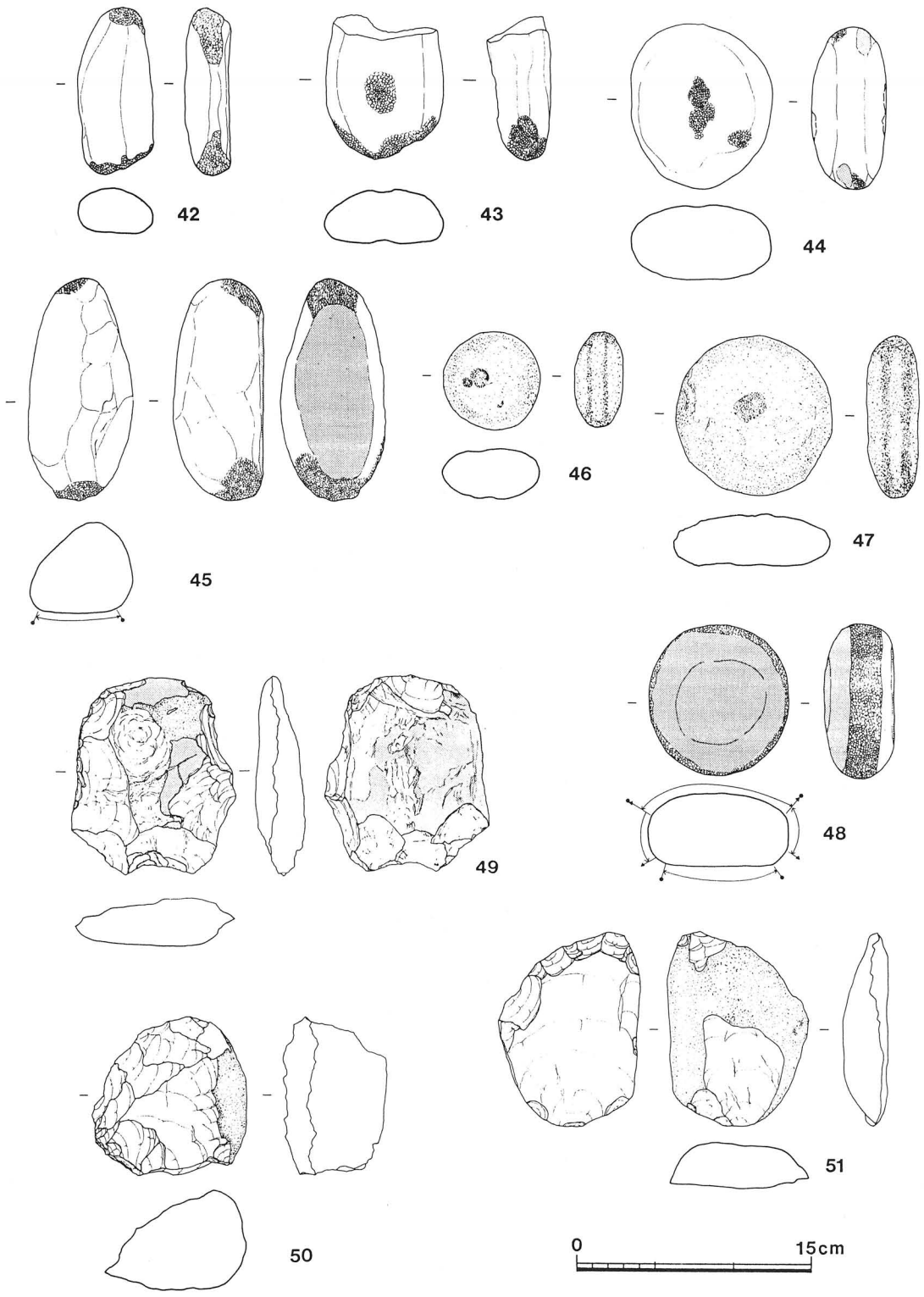
21．石器実測図①(1/3)



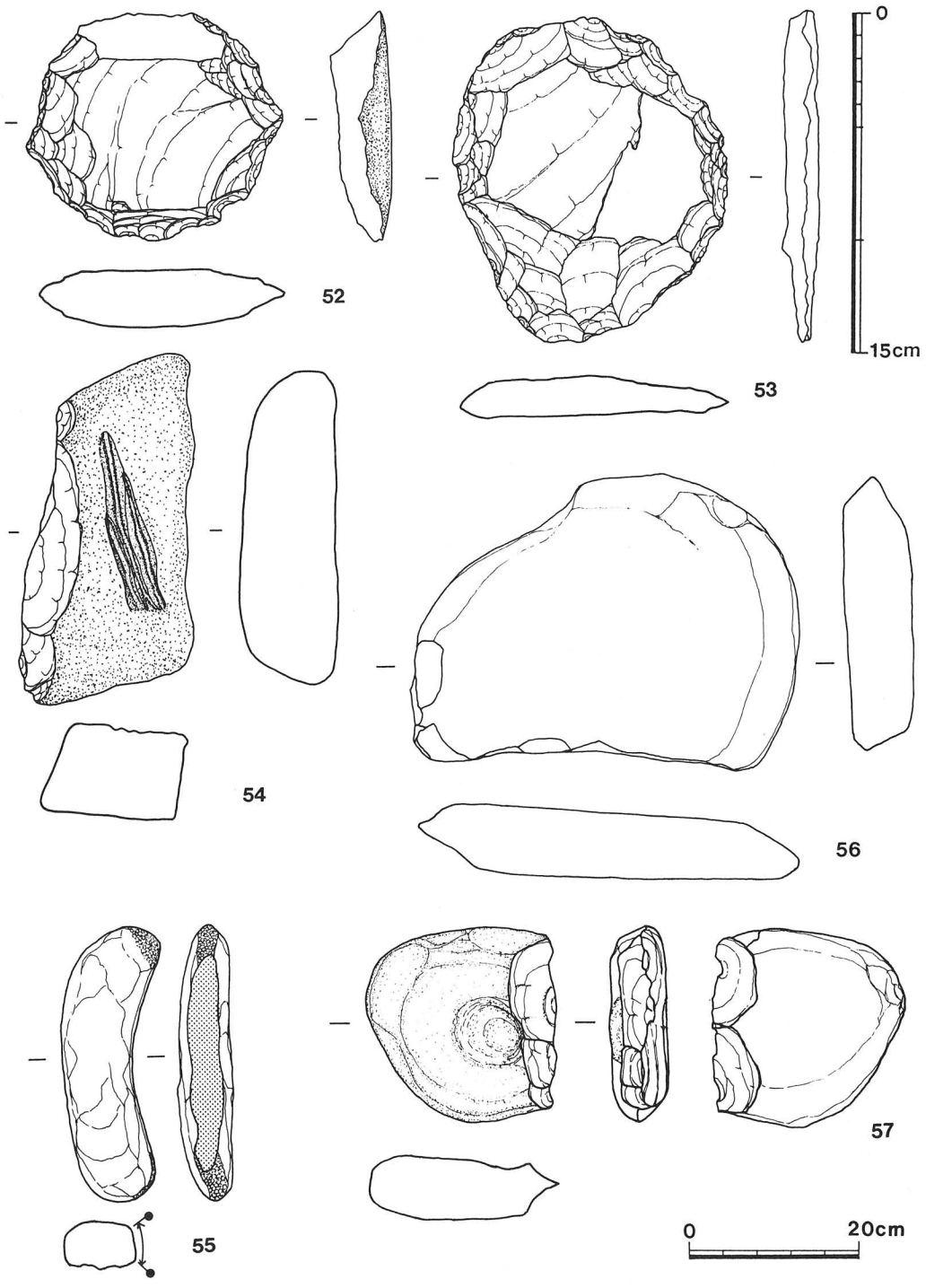
22．石器実測図②（5～20…2/3，21～30…1/3）



23．石器実測図③(1/3)

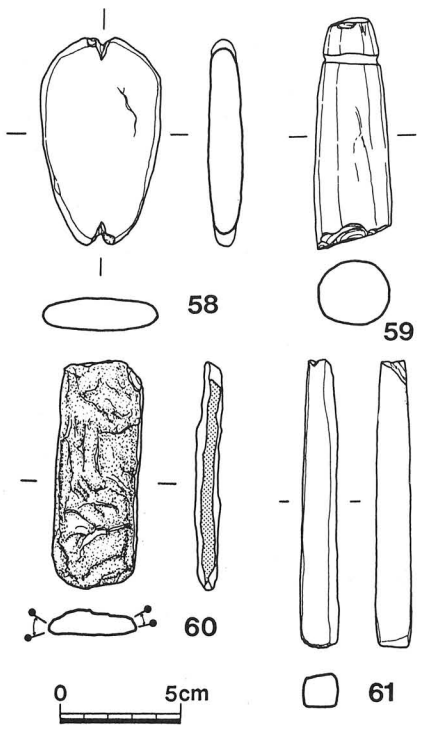


24．石器実測図④(1/4)



25．石器実測図(52～54…1/3，55～57…1/8)

52と53は偏平な砂岩礫を使用している。52は両端がやや尖り、半面には自然面が残る。54は偏平な砂岩礫の表面に3条の溝が見られる石器である。55は半月状をした砂岩礫を利用した石器である。内湾部には磨痕が、両端には敲打痕が認められる。56と57は石皿である。57の片面の中央部にはくぼみがみられる。意図的に3分の2を欠いているように思われる。58は両端に切れ目が入った石錘である。59は石棒の一部と思われる。端部近くに筋が一条巡る。60と61は頁岩を板状あるいは棒状に研磨した石器である。用途不明。



26．石器実測図⑥(1/3)

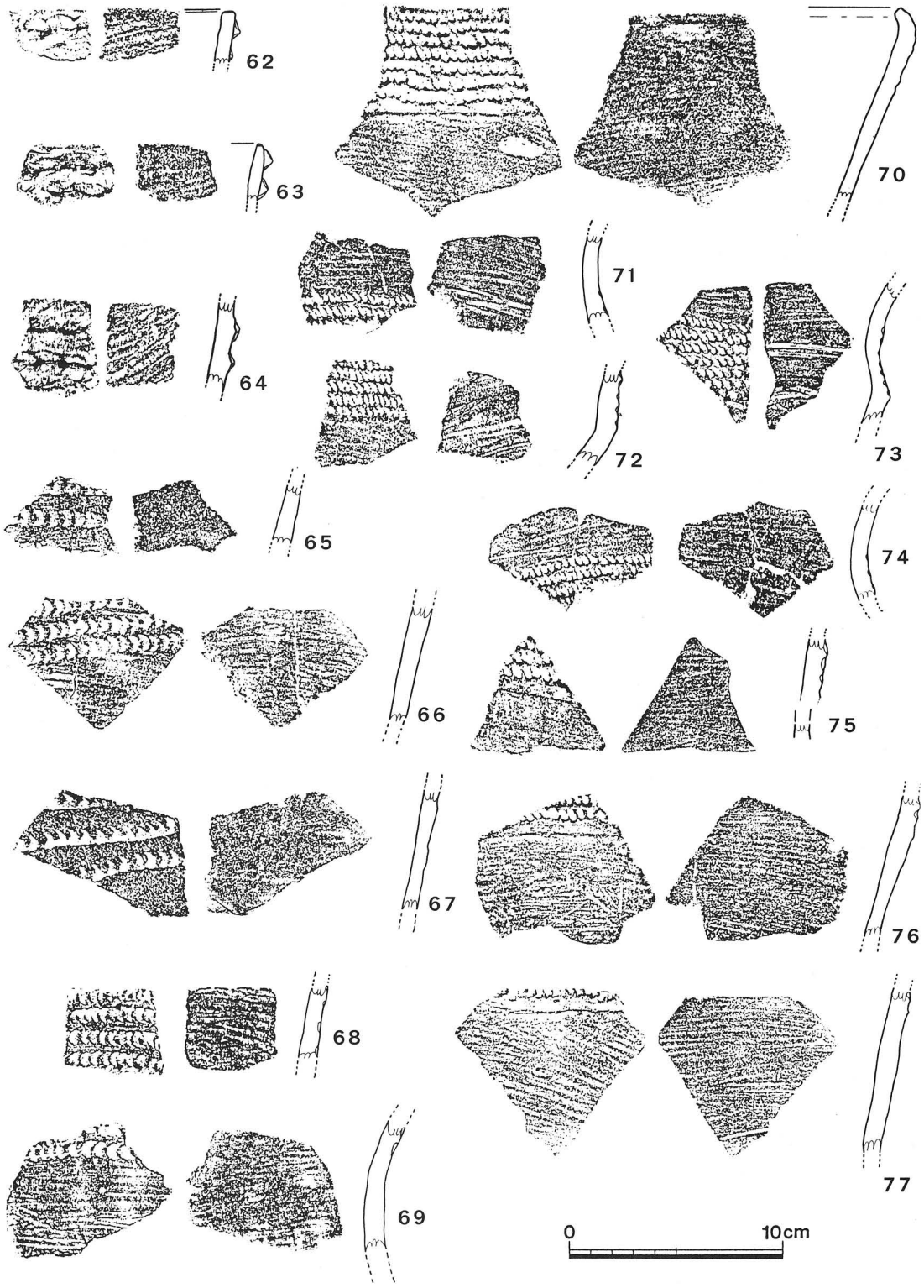
② 縄文土器

前期の轟B式土器・曽畑式土器、中期の船元II式土器、後期の市来系土器、晩期の磨研土器・凸帯文土器等が出土している。

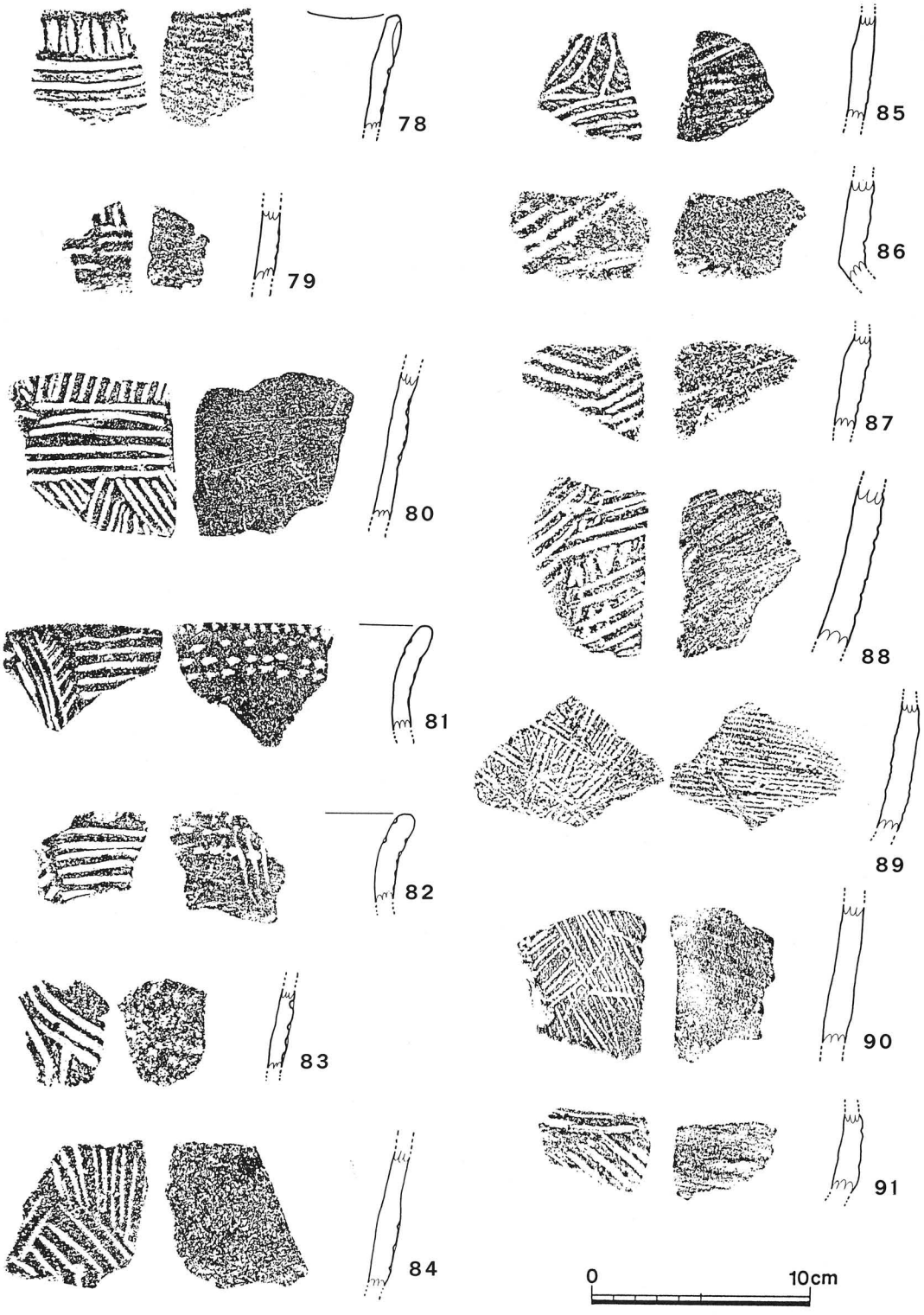
文様等から大まかに次の通り分類した。大半はI区III層からの出土であり、各式土器の間には、明確なレベル差は認められない。ただし、中期の土器は数点を除き、III層で出土している。

I類…隆帯文土器	(62～ 64)	
II類…爪形文土器	(65～ 69)	北白川下層式系土器
III類…刺突文土器	(70～ 77)	羽島下層式系土器
IV類…沈線文土器	(78～ 93)	曽畑式土器等
V類…隆線文土器	(94～126)	轟B式土器等
VI類…中期各式土器	(127～135)	船元II式土器等
VII類…後期各式土器	(136～143)	市来式系土器等
VIII類…磨研土器	(144～154)	
IX類…凸帯文土器	(155～184)	
X類…その他の土器	(185～210)	
XI類…底部	(211～214)	

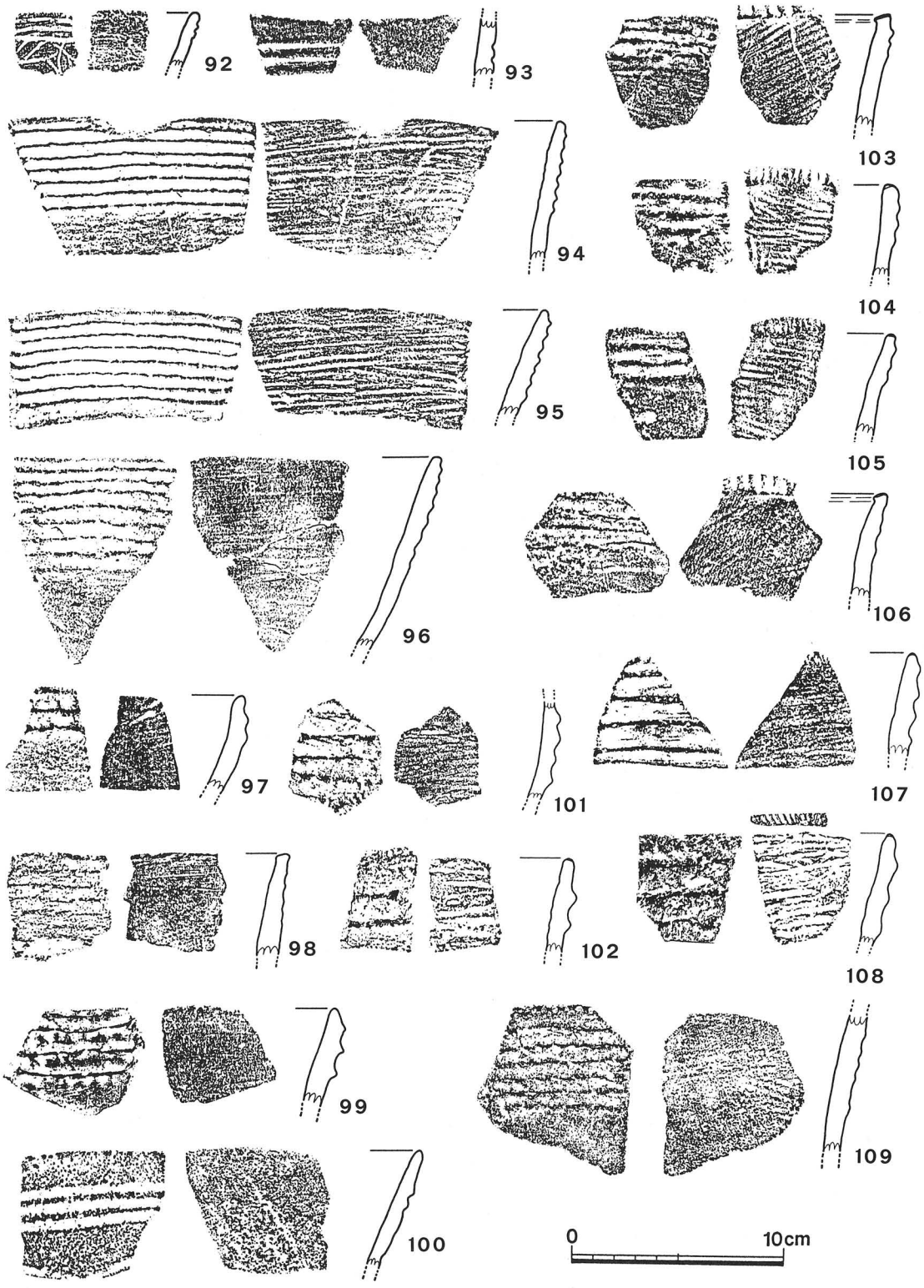
＊縄文中期土器の瀬戸内系土器に関しては、特に岡山県立博物館の高橋護氏、倉敷考古館の間壁忠彦・間壁葭子両氏の御教示を得た。



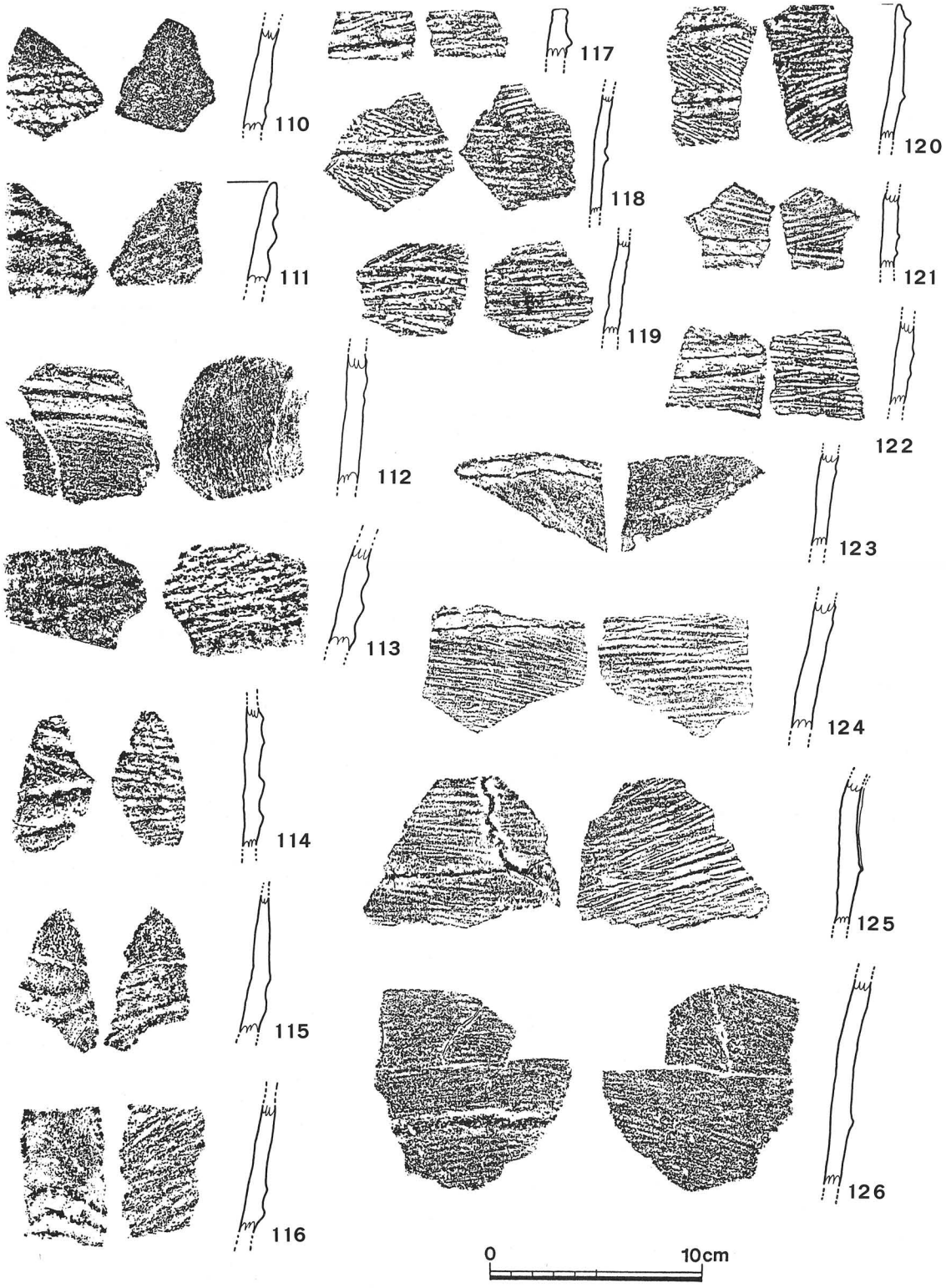
27. 縄文土器実測図①(1/3)



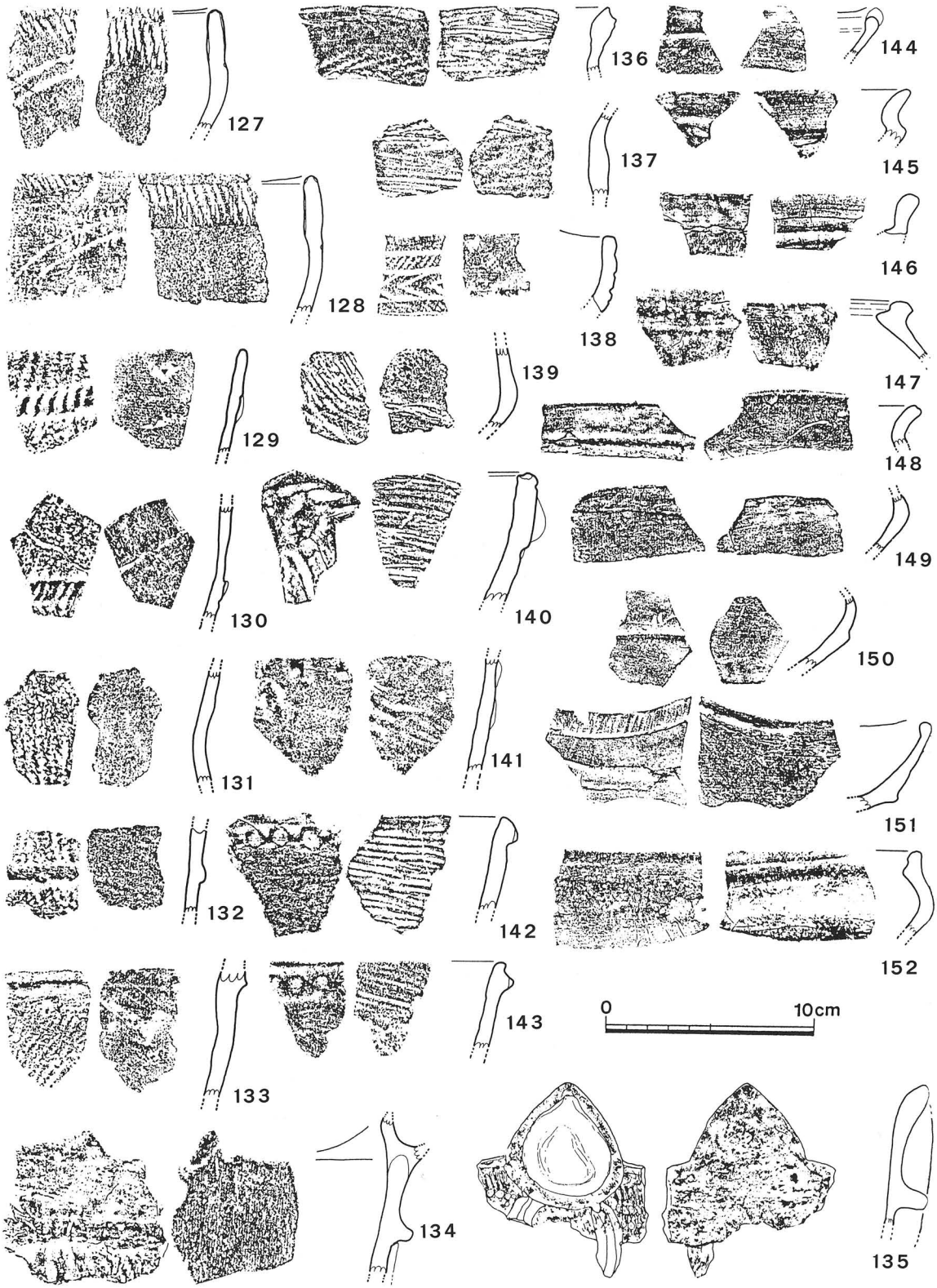
28. 縄文土器実測図②(1/3)



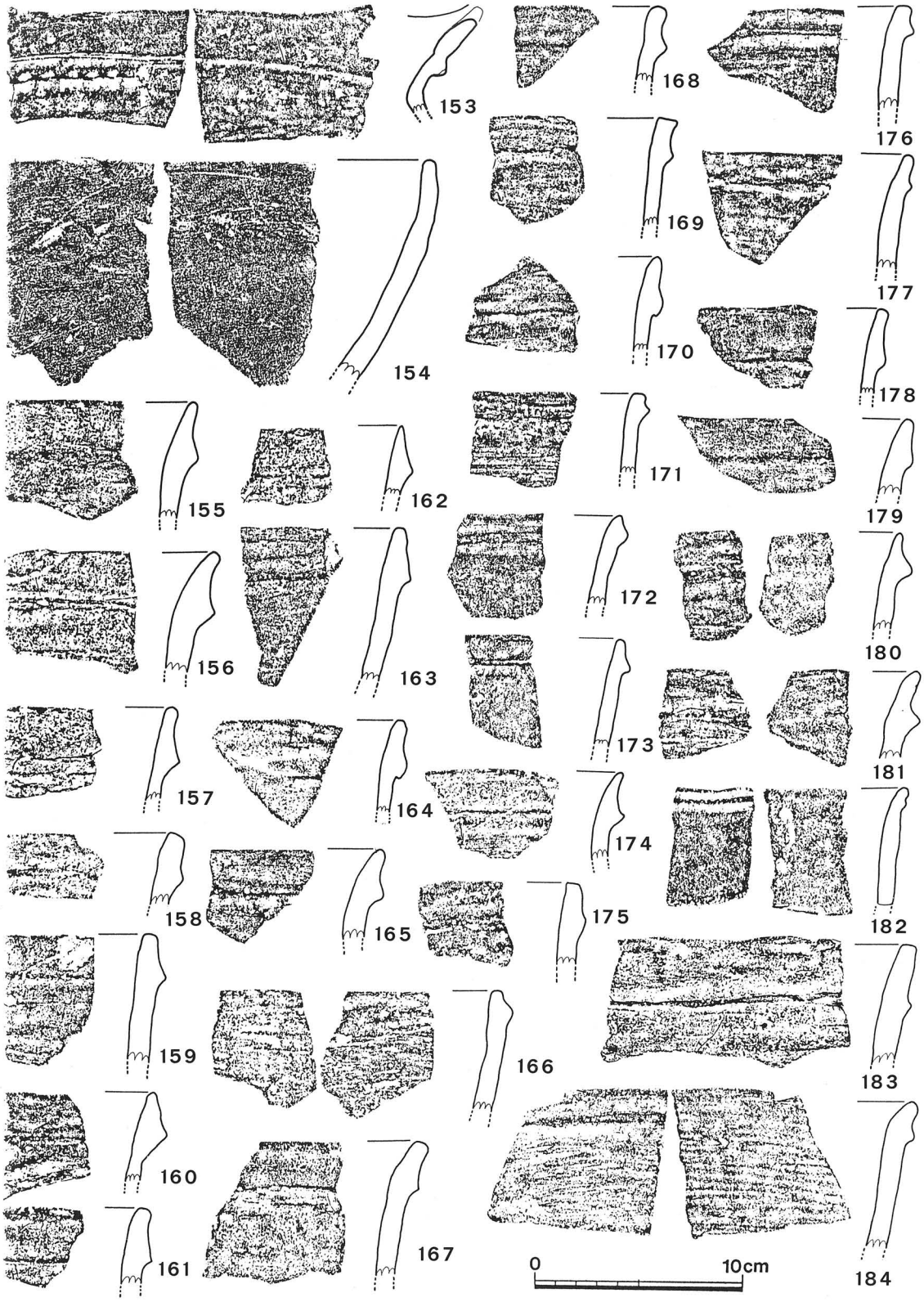
29．縄文土器実測図③(1/3)



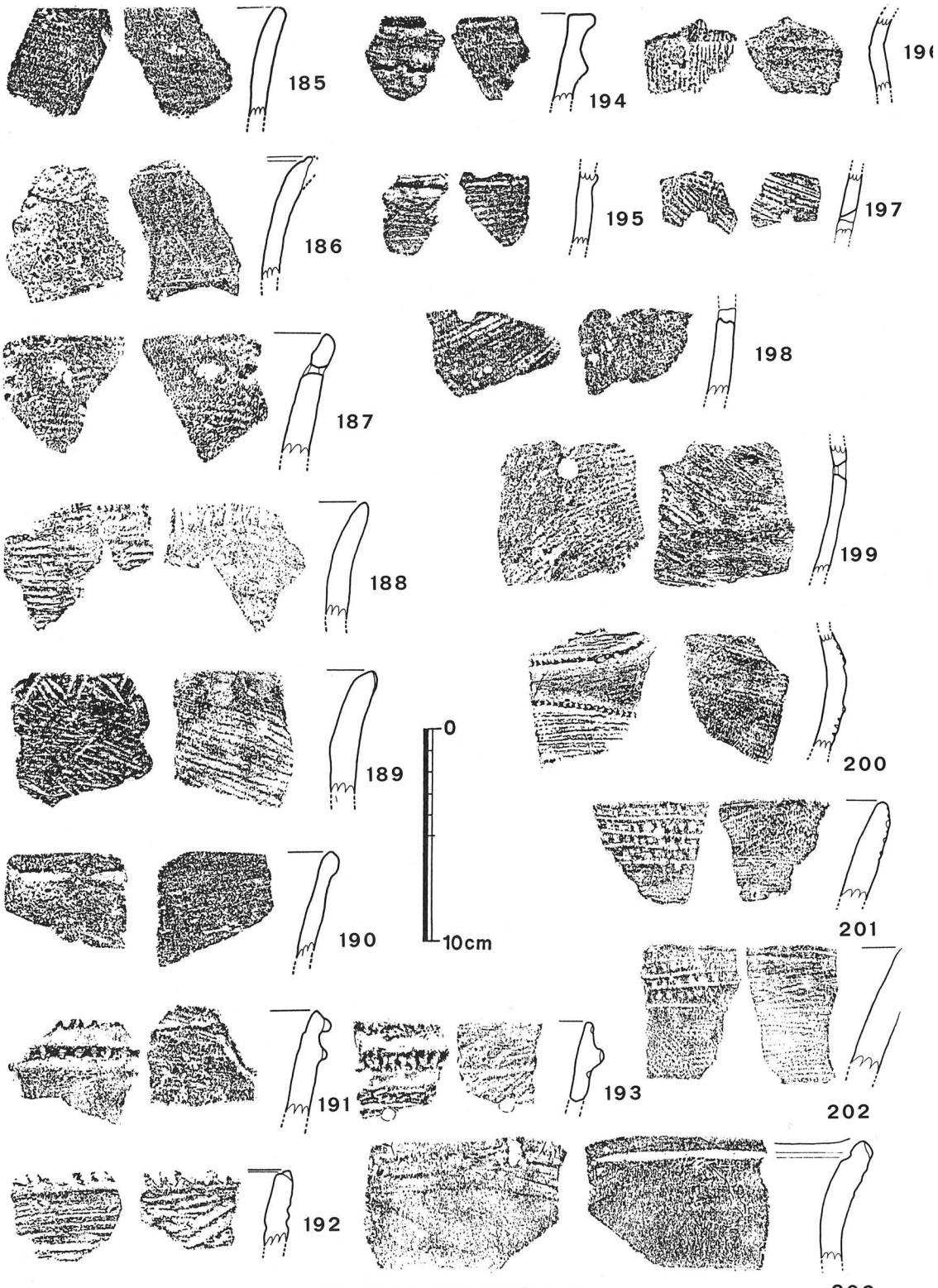
30．縄文土器実測図④(1/3)



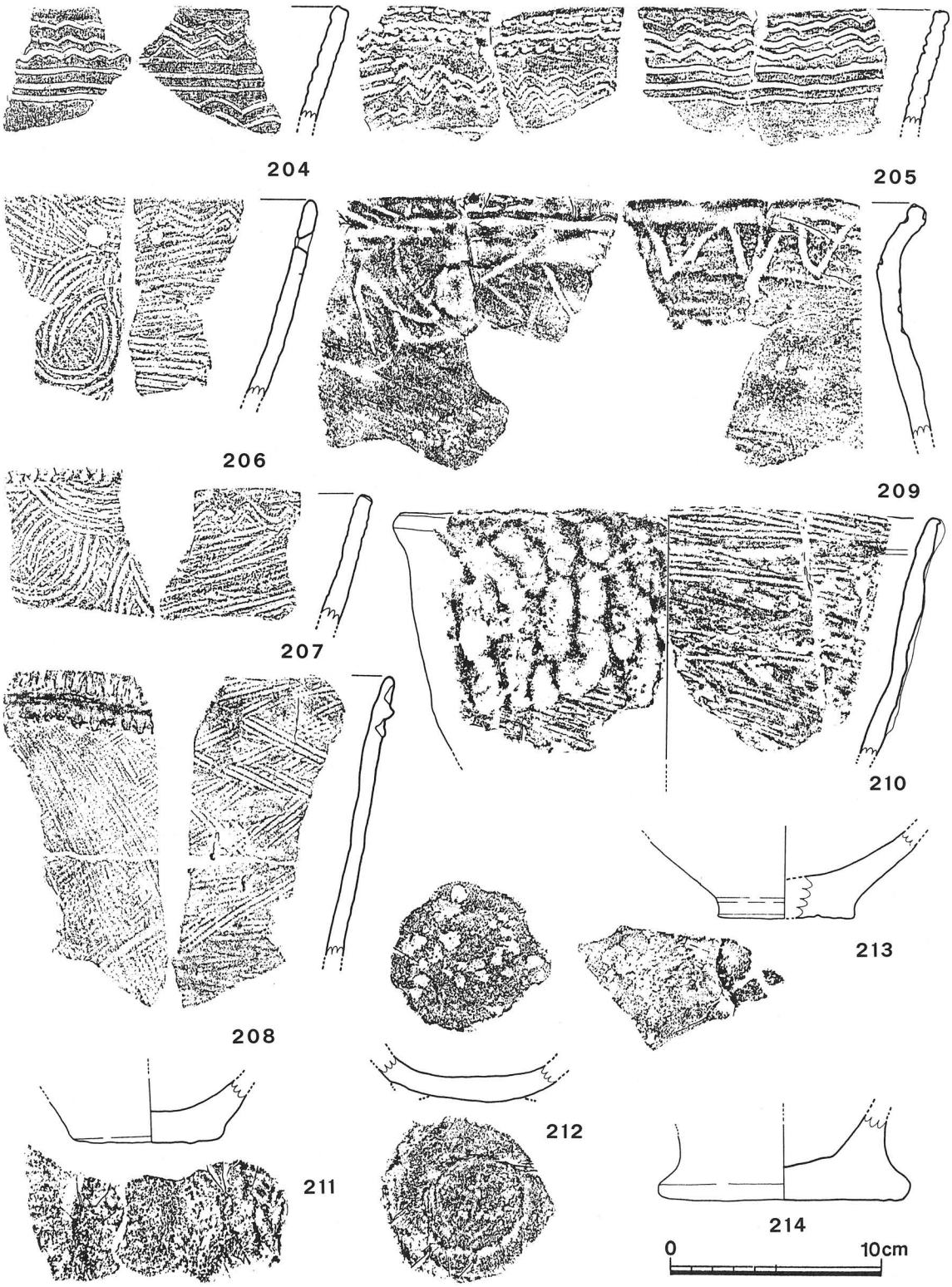
31．縄文土器実測図⑤(1/3)



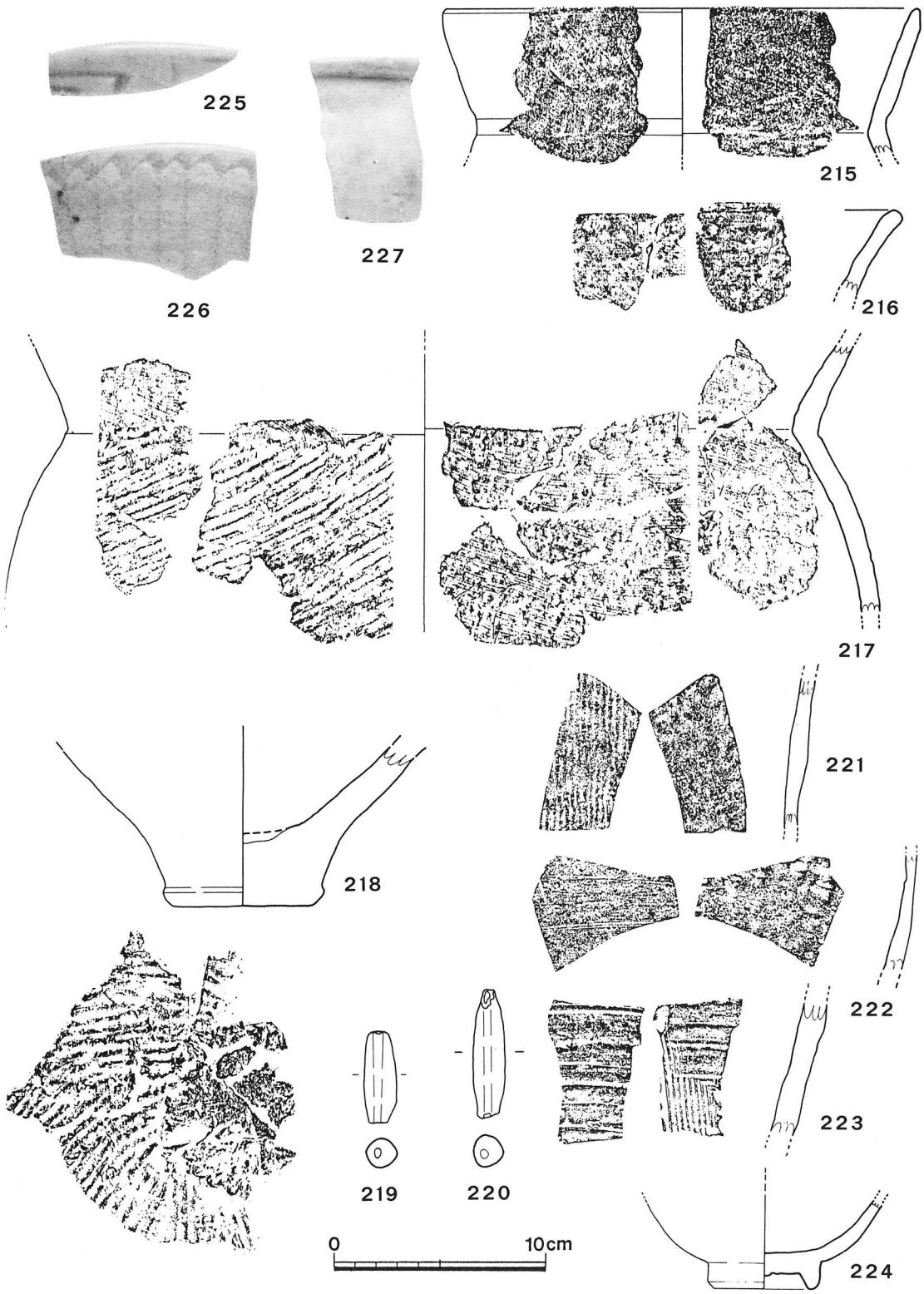
32．縄文土器実測図⑥(1/3)



33. 縄文土器実測図⑦(1/3)



34．縄文土器実測図⑧(1/3)



35．その他の出土遺物実測図(1/3)

Ⅰ類は粘土紐を口縁部に沿って器壁に押し付けた土器で、指先のつまみ痕が残る。また、内側にはナデが、口唇部には棒状工具を押し付けたと思われるへこみが見られる。Ⅲ層出土の遺物である。

Ⅱ・Ⅲ類は胎土に火山灰地帯に特有な角閃石が入ることや器壁の厚さ・色調及び裏面の貝殻条痕をナデ消している事等から、文様をそれぞれ北白川下層式土器・羽島下層式土器に似せて作ったものと思われる。Ⅳ類の中で曽畑式土器と思われるのは78～80である。

Ⅴ類の轟Ｂ式土器は本遺跡で出土した縄文土器の大半を占める。その中でも口縁直下に横方向に施文するタイプのものがほとんどである。Ⅵ類の土器の中で、瀬戸内地方からの搬入品と思われるものは127～131である。127と128はシュロ状の繊維で口縁部の内外を縦方向に施文している。133と134は同一個体と思われる。135は鶏頭状の飾りや板状工具・棒状工具による連続的な施文等から船元系土器と考えられる。

136と137は市来式系土器、138は西平系土器と思われる。139～143は調整は市来的であるが、胎土は西平式土器に似る。

Ⅷ・Ⅸ類の土器はⅤ類に次いで出土量が多い。144～153は浅鉢と思われる精製磨研土器、154は椀形の精製磨研土器、155～184は凸帯文を有する粗製の深鉢形の土器である。

185～210はⅩ類形式不明の土器である。特異な例としては、200のハ状に広がる刻み目のある突帯の中央部にはナデがその両側には沈線が見られる土器、201・202の沈線と沈線の間に列点文を配す土器、204・205の沈線あるいは列点文で口縁部の内外に文様をつける土器、206・207の沈線で渦巻状の文様をつける土器、208の口縁下部に隆帯を巡らしその上下に細長い列点文を施す土器、209の沈線で波状の模様を付ける土器、210の口縁部から胴部中央まで指圧で文様をつける土器等がある。

Ⅺ類の底部は数が少ない。円盤張りつけの痕跡を示すもの（212）や、木の葉の圧痕が認められるもの（213）などが出土している。

③ その他の土器

甕型土器の口縁部片（215）、叩きの残るほぼ一個体の壷（216～218）、土錘（219～220）、須恵質の甕片（221）、備前焼の甕片（222）・すり鉢片（223）、陶磁器椀の底部片（224）、青磁椀片（225～227）などが出土している。215は口縁部から頸部にかけてヘラケズリが見られることや胎土に角閃石が混じることなどから、縄文晩期の所産と考えられる。224には中央部にひまわりの文様が見られ、底部高台の内側は無釉である。225と226は口縁が直行する椀で226には剣先連弁が見られる。227は端反りの椀である。

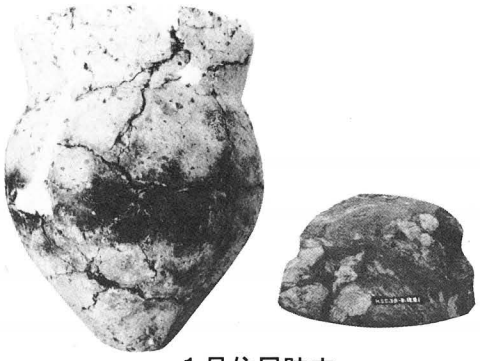
Ⅲ．終　わ　り　に

今回の調査の結果、Ⅲ層中で集石遺構３基、アカホヤ層の上面で古墳時代前期の住居跡１基・土坑１基、時期不明の溝状遺構１基・多数の土坑及び柱穴を検出した。また、旧石器時代の石核やスクレイパー、縄文時代早期・前期・中期・後期・晩期の土器・石器・古墳時代の土師器、中・近世の陶磁器等の遺物が出土した。

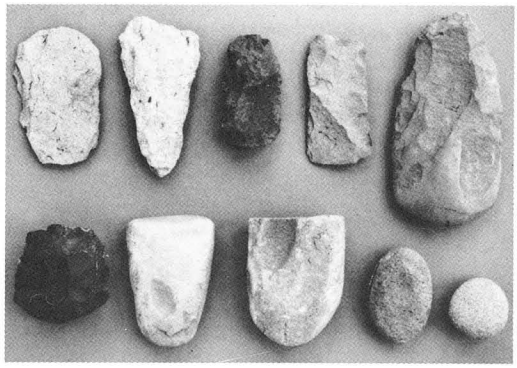
特に、包含層中より縄文時代前期・中期の様々なタイプの遺物を確認できたことは、当町では初めてであり県下でも例数が少なく貴重である。県内の縄文前期・中期の遺跡の数が、前後の早期や後・晩期に比べ極端に少ないのは、所によっては１ｍ以上にも堆積しているアカホヤ火山灰の影響と考えられている。県北では、これまで縄文時代前期では延岡市の大貫（おおぬき）貝塚で本遺跡出土のⅡ類に似た爪形文が、日之影町田向（たむか）遺跡で曽畑式土器が、北方町岩土原遺跡・日之影町一の水岩戸口遺跡・高千穂町陣内（じんない）遺跡等で轟式土器が出土している。縄文時代中期では、本遺跡南側の笠下遺跡で船元式土器が、北川町可愛（え）遺跡で並木式土器が、日之影町一の水岩戸口遺跡で阿高系土器が出土している。また、アカホヤ層より上位で集石遺構を検出した遺跡は、宮崎郡田野町天神河内第１遺跡及び仝町丸野第２遺跡・仝町青木遺跡・南郷町崩野遺跡と少なく、主に県南に集中している。県北では本遺跡が初例である。時期は神河内第１遺跡が縄文時代中期、丸野第２遺跡・青木遺跡・崩野遺跡が縄文時代後期である。本遺跡の資料は、今後五ヶ瀬川流域における縄文時代前期・中期遺跡群の展開過程や多地域（特に瀬戸内地域）との関係を解明していく上で基礎的な資料として注目されよう。

次に、古墳時代前期の住居跡であるが、南側の約半分を検出したのみで遺物も少なく、不明な点が多い。しかし、砂岩製の打製石器は弧状の刃部や抉りを意識した加工等から収穫具の可能性が高く、生活の一端を垣間見るようで興味深い。今後は、当時の生産手段や生活環境等を解明するための調査や資料の蓄積が必要となろう。詳細は本報告に期したい。

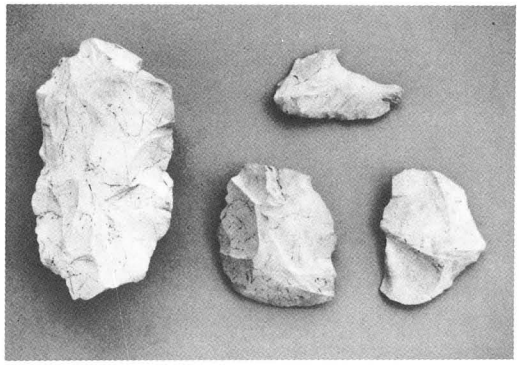
＜参考文献＞
宮崎県『宮崎県史　資料編　考古１』 1989
北方町教育委員会『笠下遺跡』 1990
田野町教育委員会『丸野第２遺跡』 1990
宮崎県教育委員会『天神河内第１遺跡』 1991
＊この他、県北の縄文時代前期・中期の遺跡については北川町沢皇臣氏より、集石遺構については宮崎県文化課菅付和樹・谷口武範両氏より御教示いただいた。



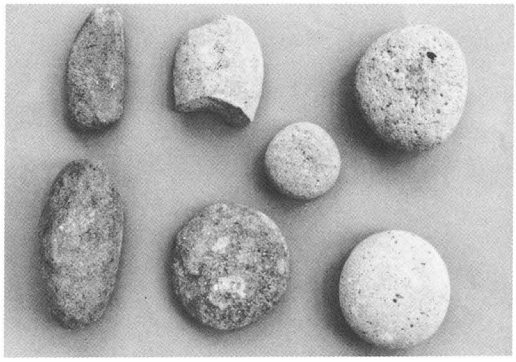
1号住居跡内



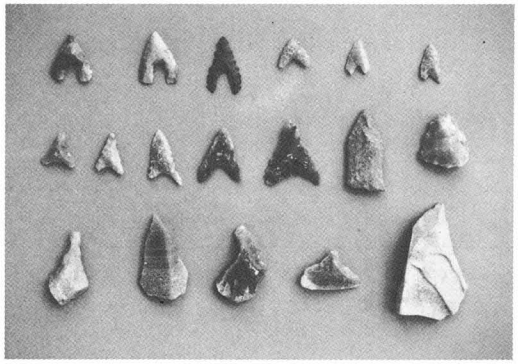
32～41



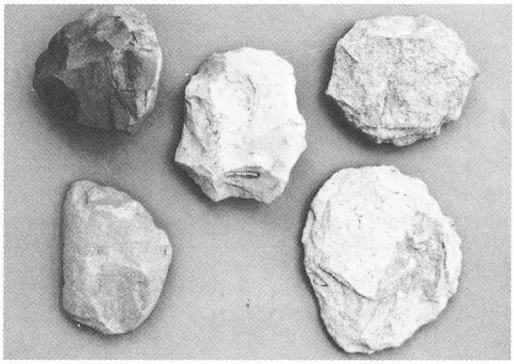
1～4



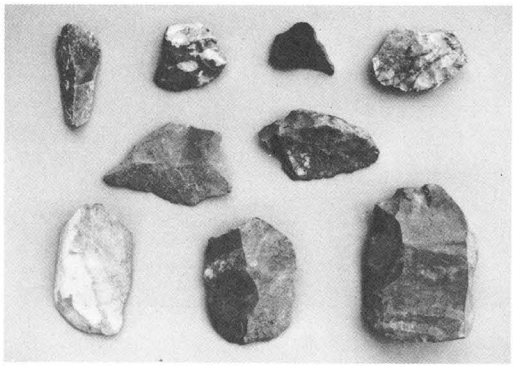
42～48



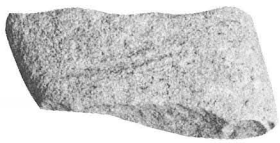
5～22



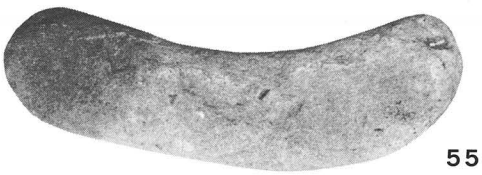
49～53



23～31



54

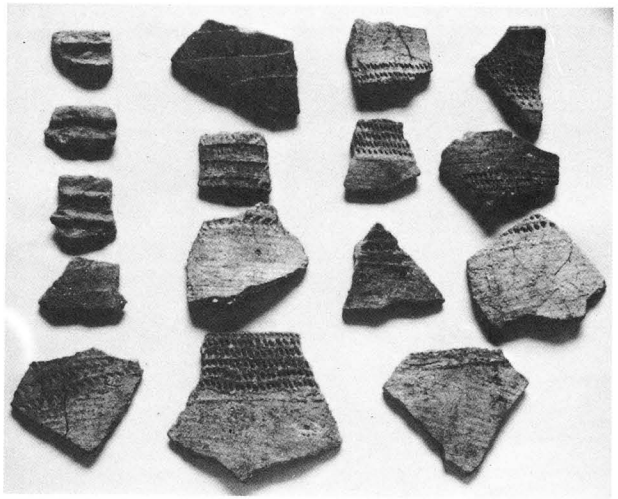


55

36．出土石器

56

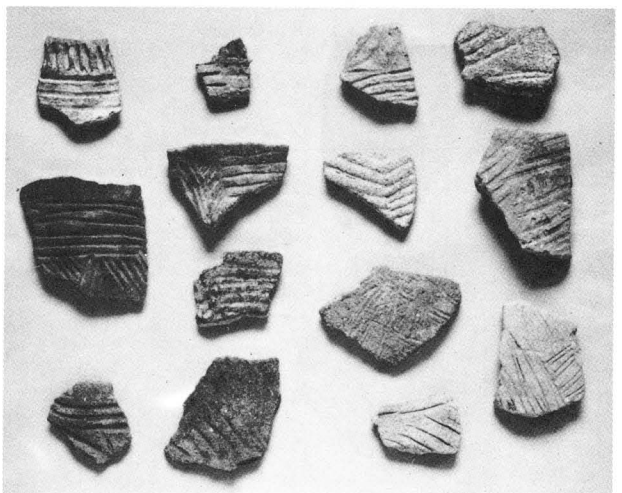
57



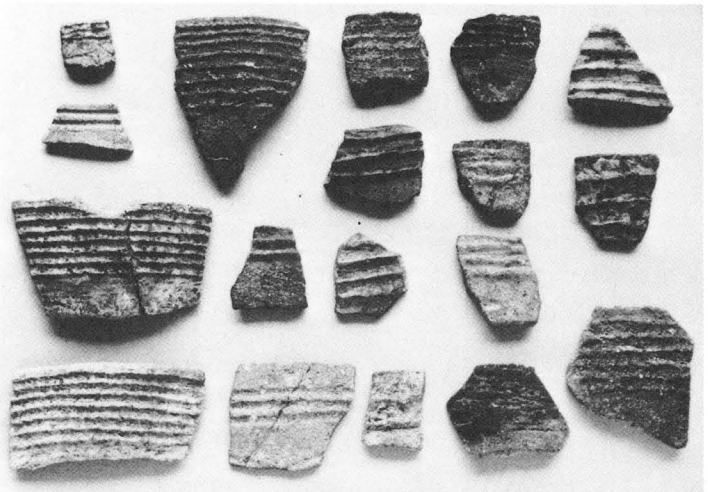
62～77

58～61

37. 出土石器・土器



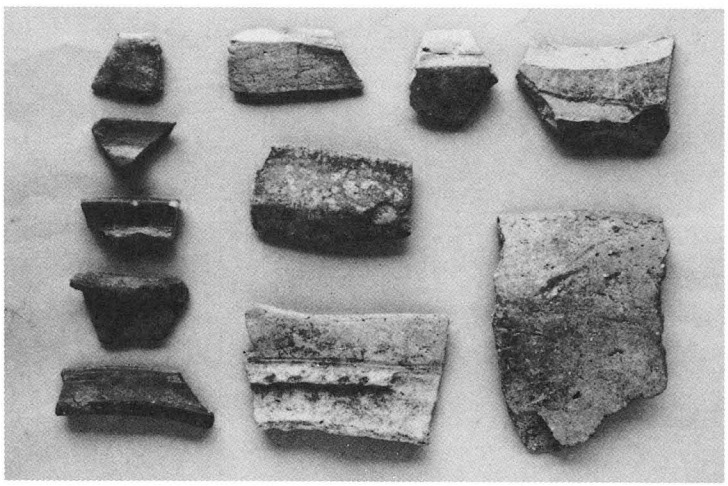
78～91



92～109

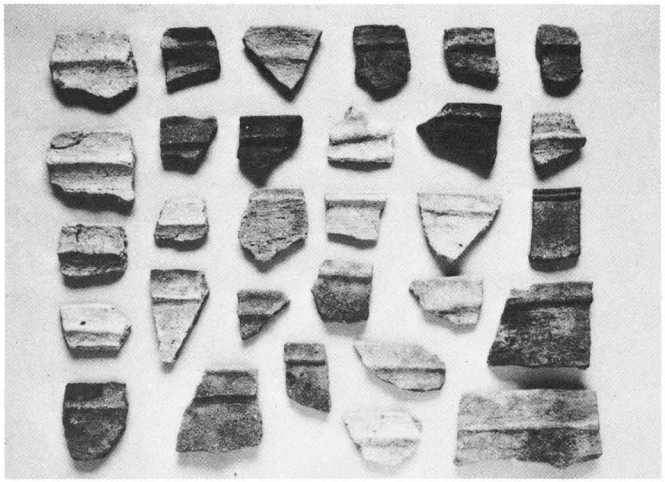
127～143

110～126

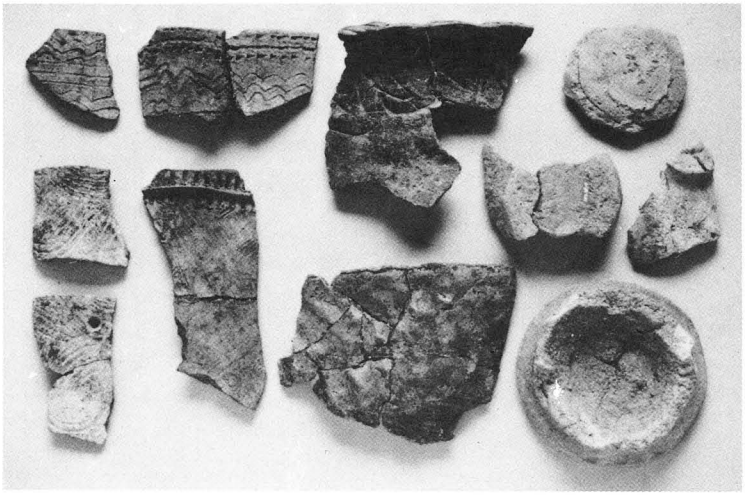


144～154

38. 出土土器

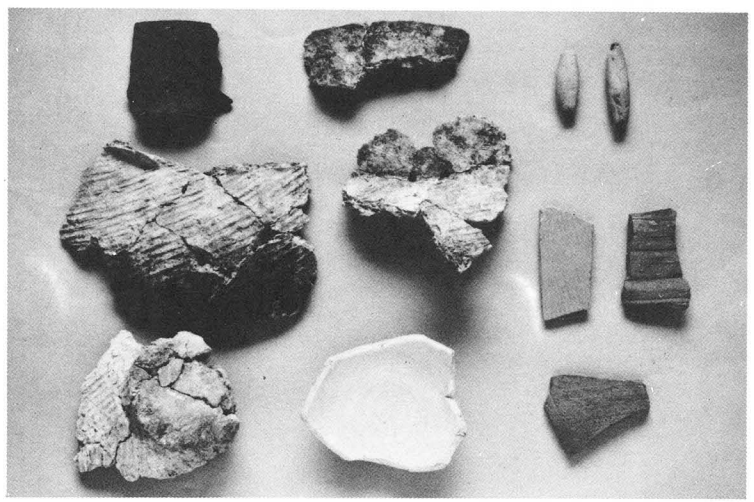


155～184



204～214

185～203



215～224

39. 出土土器・陶磁器他

笠下下原遺跡

発行日　１９９２年3月３１日

編集・発行　北方町教育委員会

印刷　クラフト印刷

宮崎県東臼杵郡北方町子4146

電話（0982）４７−３２１０番